

福岡市西区

HIRO ISHI MINAMI

広石南古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第214集

1989

福岡市教育委員会





空中写真は、建設省国土地理院製の承認を得て、同院発行の4万分の1
縮尺の写真を複製したものである。(承認番号) 昭63-九海、第857号]

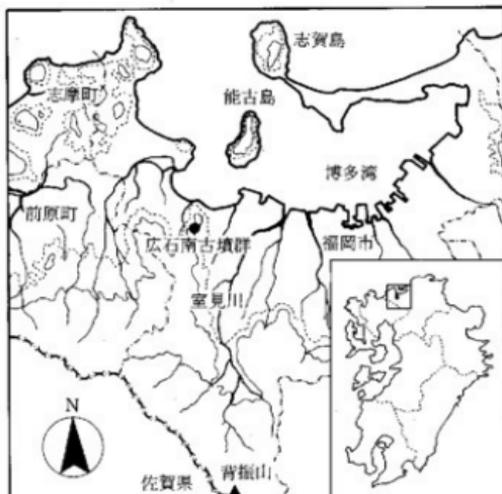
広石南古墳群正誤表

P	行	誤	正
III	15	b. 横穴石室・・・・・・・・・・11	b. 横穴式石室・・・・・・・・・・14
"	19	b. 横穴石室・・・・・・	b. 横穴式石室・・・・・・
IV	10	(縮尺 $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{4}$)	(縮尺 $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3}$)
"	24	(1) 1号墳調査前遠景	(1) 1号墳調査前近景
"	"	(2) 1号墳調査前近景	(2) 1号墳調査前遠景
V	9	(1) 右側壁玄門隅角上段部	(1) 右側壁玄門隅角上段部
"	"	(2) 右側壁玄門隅角中段部	(2) 右側壁玄門隅角中段部
"	10	(3) 右側壁玄門隅角下段部	(3) 右側壁玄門隅角下段部
"	"	(4) 左側壁玄門隅角上段部	(4) 左側壁玄門隅角上段部
"	11	(5) 左側壁玄門隅角中段部	(5) 左側壁玄門隅角中段部
"	"	(6) 左側壁玄門隅角下段部	(6) 左側壁玄門隅角下段部
"	27	(1) 2号墳出土遺物-2 (縮尺 $\frac{1}{3}$)	(1) 2号墳出土遺物-2 (縮尺 $\frac{1}{6}$)
7	Fig	38. 本村古墳群A群	38. 本村古墳群A群
8	Fig	Fig.5 古墳群地形測量図 (縮小 $\frac{1}{300}$)	Fig.5 古墳群地形測量図 (縮尺 $\frac{1}{300}$)
Fig.	10	6. 白色粗砂混雑茶灰色土	6. 白色粗砂混雑暗茶灰色土
"	"	土層上段図左辺 23と2の間の土層名が空白	土層上段図左辺 23と2の間の空白土層は10
"	"	土層上段図中央 5と2の間の土層名が空白	土層上段図中央 5と2の間の空白土層は8
16	6	第一堀石の設けられている床面高が	第一堀石の設けられている床面標高が
"	Fig	Fig.13 1号墳羨道部閉塞状況図 (縮尺 $\frac{1}{40}$)	Fig.13 1号墳閉塞施設実測図 (縮尺 $\frac{1}{40}$)
20	Fig	Fig.18 1号墳出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{4}$)	Fig.18 1号墳出土遺物実測図 (縮尺 $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3}$)
Tabl	6	1号墳羨道・・・・・・	1号墳羨道閉塞施設
Fig.	20	B L=4,100m D L=4,100m	B L=4,100m D L=4,100m
"	"	土層上段図左辺 IIとIIの間の土層名が空白	土層上段図左辺 IIとIIの間の空白土層はV
"	"	土層上段図右辺 VIIとVIの間の土層名が空白	土層上段図右辺 VIIとVIの間の空白土層はIX
38	3	広石南古墳群B群2号墳遺物一覧表 (HIM-2)	削 除
PL.	1	飯代古墳群L群	飯氏古墳群L群
"	"	本村古墳群A群	本村古墳群A群
PL.	3	(1) 1号墳調査前遠景	(1) 1号墳調査前近景
"	"	(2) 1号墳調査前近景	(2) 1号墳調査前遠景
PL.	9	(2) 1号墳 掘り方と石室 (南から)	(2) 1号墳 掘り方と石室 (南から)
PL.	10	(1) 1号墳 掘り方と石室 (西から)	(1) 1号墳 掘り方と石室 (西から)
"	"	(2) 1号墳 掘り方と石室 (北から)	(2) 1号墳 掘り方と石室 (北から)
PL.	24	(1) 右側土層の掘り方 (南から)	(1) 右側土層と掘り方 (南から)
PL.	29	(2) 玄室排除後の掘り方 (西から)	(2) 玄室排除後の掘り方 (西から)
PL.	31	(1) 2号墳出土遺物-2 (縮尺 $\frac{1}{3}$)	(1) 2号墳出土遺物-2 (縮尺 $\frac{1}{3}$)

(表紙題字：結城シズ)

広石南古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第214集



遺跡略号 HIM-B

調査番号 8809

1989

福岡市教育委員会

序

福岡市は地理的關係から、古く東アジアと我が国との交流の門戸として発展を遂げてきました。この歴史的背景から市内には各時代の文化財が数多く埋蔵されています。しかしながら、近年の都市の発展に伴う開発によって、我々の先人が地中に残してきた文化的足跡とでも言うべき、埋蔵文化財が消滅しつつあります。このため福岡市教育委員会では遺跡を保存すべく、各種開発事業に先立って発掘調査を行い、記録保存に努めています。

今回報告します広石南古墳群B群の発掘調査報告書は、私立大学のグラウンド整備拡張工事に先立って行った発掘調査記録です。この調査では二基の古墳の調査を行い、福岡市西部地区における古代の埋葬方法を明らかにすると共に、社会構造・文化を含め多くの成果を納めることができました。

今後、本報告書および資料が、学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後に、調査に際し協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位の皆様にご心よりお礼申し上げます。

平成元年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤善郎

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が昭和63年5月10日から同年7月31日において福岡市西区今宿青木字広石南1024-1他に所在する広石南古墳群B群1・2号墳を発掘調査した報告書である。
2. 遺跡名は福岡市教育委員会発行の文化財分布地図－西部Ⅰ－からによる。
3. 発掘調査は福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課が行い、同課職員の瀧本正志・二宮忠司が担当した。事務は岸田隆が担当した。
4. 本書の執筆分担は下記のとうりである。
第1章・第2章・第3章1・第4章：瀧本
第3章2：村上かをり、第3章3：大庭友子
5. 本書で用いた遺構・遺物の図面は、村上・大庭・瀧本・二宮が実測・整図した。
6. 本書で用いた遺物・遺構の写真は、大庭・瀧本・二宮が撮影した。
7. 本書での方位は全て磁北を示し、この方位は真北より6°21'西偏する。
8. 本書の編集は、瀧本と二宮が行った。
9. 本書で報告した発掘調査に係わる遺物・記録類の全ては、福岡市立埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田2丁目）に収蔵されているので活用された。

遺 跡 名	広石南古墳群B群1号墳・2号墳		
遺 跡 略 号	HIM-B	調 査 番 号	8809
調 査 地	福岡市西区今宿青木字広石南1042-1 福岡市西区今宿青木字広石サヤ1043-26		
調 査 期 間	昭和63年5月10日～昭和63年7月31日		
調 査 対 象 面 積	16,800㎡	調 査 面 積	1,125㎡ (古墳2基)

本文目次

	頁
第1章 はじめに	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 発掘調査の組織	1
3. 発掘調査の経過	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	5
1. 遺跡の位置と立地	5
2. 遺跡の歴史的環境	5
3. 遺跡の名称	6
第3章 調査の記録	10
1. 遺跡の概要	10
2. 第1号墳	10
a. 墳丘	10
b. 横穴石室	11
c. 出土遺物	17
3. 第2号墳	22
a. 墳丘	22
b. 横穴石室	27
c. 出土遺物	32
第4章 まとめ	39

挿図目次

Fig. 1 遺跡位置図 (縮尺 1/200,000)	VI
Fig. 2 周辺地形図 (縮尺 1/2,000)	3
Fig. 3 周辺遺跡分布図 (縮尺 1/50,000)	4
Fig. 4 周辺古墳群分布図 (縮尺 1/25,000)	7
Fig. 5 古墳群地形測量図 (縮尺 1/300)	8
Fig. 6 古墳群墳丘遺存図 (縮尺 1/300)	9
Fig. 7 1号墳現況測量図 (縮尺 1/200)	11
Fig. 8 1号墳墳丘遺存図 (縮尺 1/200)	12

Fig.9	1号墳地山整形図(縮尺1/200)	13
Fig.10	1号墳墳丘土層図(縮尺1/60)	折込み
Fig.11	1号墳石室実測図(縮尺1/50)	折込み
Fig.12	1号墳平面図(縮尺1/60)	15
Fig.13	1号墳閉塞施設実測図(縮尺1/40)	16
Fig.14	1号墳出土遺物実測図(1)(縮尺 $\frac{1}{6}$)	17
Fig.15	1号墳出土遺物実測図(2)(縮尺 $\frac{1}{6} \cdot \frac{1}{4}$)	18
Fig.16	1号墳出土遺物実測図(3)(縮尺 $\frac{1}{6}$)	19
Fig.17	1号墳出土遺物実測図(4)(縮尺 $\frac{1}{6}$)	20
Fig.18	1号墳出土遺物実測図(5)(縮尺 $\frac{1}{6} \cdot \frac{1}{4}$)	20
Fig.19	2号墳現況測量図(縮尺1/200)	23
Fig.20	2号墳土層断面図(縮尺1/40・1/200)	折込み
Fig.21	2号墳墳丘遺存測量図(縮尺1/100)	25
Fig.22	2号墳地山整形測量図(縮尺1/100)	26
Fig.23	2号墳石室実測図(縮尺1/60)	28
Fig.24	2号墳石室俯瞰図(縮尺1/40)	29
Fig.25	2号墳閉塞施設実測図(縮尺1/60)	31
Fig.26	2号墳出土遺物実測図(1)(縮尺 $\frac{1}{6}$)	33
Fig.27	2号墳出土遺物実測図(2)(縮尺 $\frac{1}{6}$)	34
Fig.28	2号墳出土遺物実測図(3)(縮尺 $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{6}$)	36

図版目次

PL.1	(1) 調査地周辺航空写真
PL.2	(1) 調査地航空写真
PL.3	(1) 1号墳調査前遠景(南から) (2) 1号墳調査前近景(南から)
PL.4	(1) 1号墳墳丘遺存状況(南から) (2) 1号墳墳丘遺存状況(東から)
PL.5	(1) 1号墳羨道部閉塞状況(南から) (2) 1号墳羨道部閉塞状況(北から)
PL.6	(1) 1号墳周溝堆積状況(南から) (2) 1号墳周溝(南から)
PL.7	(1) 1号墳列石出土状況(西から) (2) 1号墳墳丘遺物出土状況(南から)
PL.8	(1) 1号墳墳丘版築状況(南から) (2) 1号墳墳丘版築状況(東から)
PL.9	(1) 1号墳地山整形と石室(南から) (2) 1号墳掘り方と石室(南から)
PL.10	(1) 1号墳掘り方と石室(西から) (2) 1号墳掘り方と石室(北から)
PL.11	(1) 1号墳石積み状況(東から) (2) 1号墳石積み状況(西から)

PL.12	(1) 玄門上段部	(2) 玄門下段部
	(3) 奥壁上段部	(4) 奥壁下段部
PL.13	(1) 左側壁上段部	(2) 左側壁中段部
	(3) 右側壁上段部	(4) 右側壁中段部
	(5) 右側壁下段部	
PL.14	(1) 左側壁奥壁隅角上段部	(2) 左側壁奥壁隅角中段部
	(3) 左側壁奥壁隅角下段部	(4) 右側壁奥壁隅角上段部
	(5) 右側壁奥壁隅角中段部	(6) 右側壁奥壁隅角下段部
PL.15	(1) 右側壁玄關隅角上段部	(2) 右側壁玄關隅角中段部
	(3) 右側壁玄關隅角下段部	(4) 左側壁玄關隅角上段部
	(5) 左側壁玄關隅角中段部	(6) 左側壁玄關隅角下段部
PL.16	(1) 1号墳出土遺物-1	
PL.17	(1) 1号墳出土遺物-2	
PL.18	(1) 調査前1・2号墳(南から)	(2) 2号墳現況近景(西から)
PL.19	(1) 墳丘遺存状態(北から)	(2) 墳丘遺存状態(前庭部まで)
PL.20	(1) 閉塞施設検出状態(西から)	(2) 閉塞施設検出状態(墳丘から)
PL.21	(1) 閉塞施設と前庭部(東から)	(2) 前庭部土器出土状態(西から)
PL.22	(1) 墳丘遺存状態とトレンチ(南から)	(2) 閉塞施設排除後の羨道部(西から)
PL.23	(1) 石室俯瞰と土層状態(東から)	(2) 掘り方と土層(東から)
PL.24	(1) 右側土層と掘り方(南から)	(2) 石室俯瞰と掘り方(東から)
PL.25	(1) 地山整形と石室側面(南から)	(2) 地山整形と石室(北から)
PL.26	(1) 石室遺存状態(西から)	(2) 羨道部検出状態(北から)
PL.27	(1) 壙石と袖石検出状態	(2) 玄室奥壁(羨道部から玄室を望む)
PL.28	(1) 右側袖石部分(玄室より)	(2) 左側袖石部分(玄室より)
PL.29	(1) 玄室内より出土の土篩器	(2) 玄室排除後の掘り方(西から)
PL.30	(1) 2号墳出土遺物-1(縮尺 $\frac{1}{2}$)	
PL.31	(1) 2号墳出土遺物-2(縮尺 $\frac{1}{2}$)	
PL.32	(1) 2号墳出土遺物-3(縮尺 $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{3}$)	

表 目 次

Tab. 1	1号墳出土掲載遺物一覧表 …… 21	Tab. 2	2号墳出土掲載遺物一覧表 …… 38
--------	--------------------	--------	--------------------

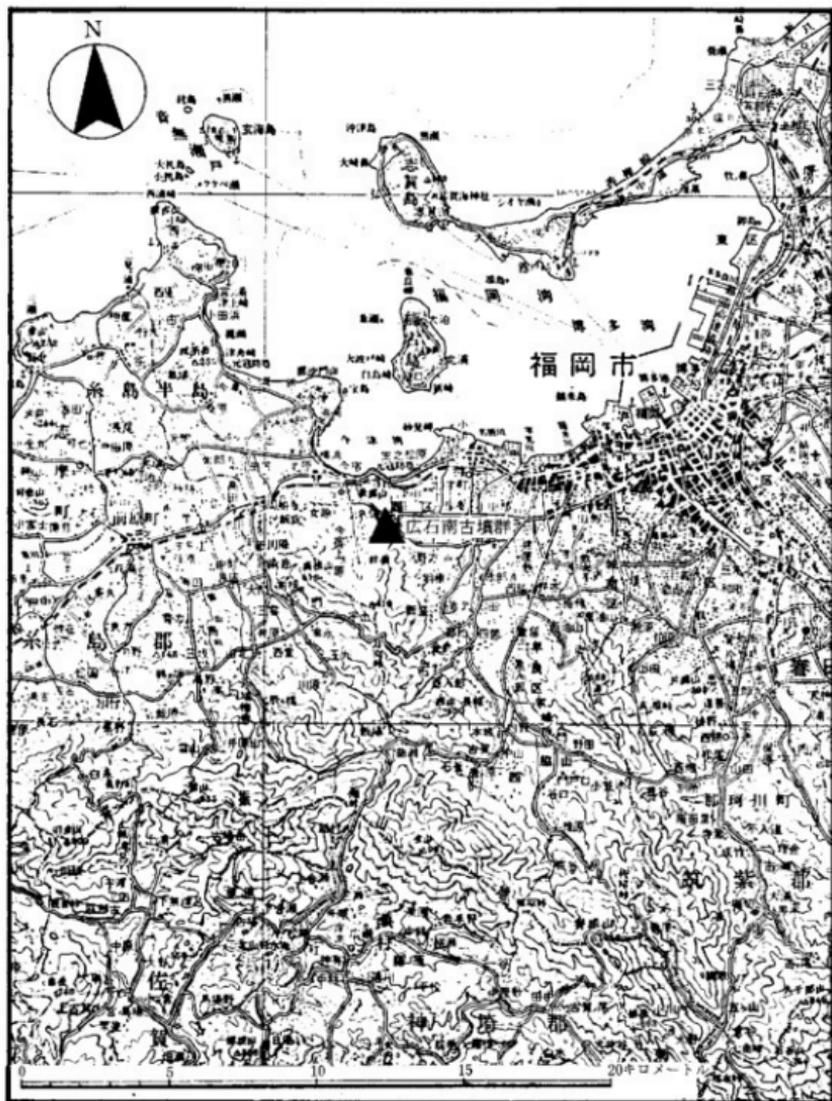


Fig. 1 遺跡位置図 (縮尺1/200,000)

第1章 はじめに

1. 発掘調査に至る経過

近年における福岡市は、九州の管理中枢都市としての度合いを強め、その発展に伴い着実に人口が増加している。この人口増加の要因としては外部からの転入によるものが大きい。人口が増加したからと言って日常生活と結び付いた市民サービスの低下は許されない。人の増加に伴って確実に増加するのが廃棄物であるが、本市でも西部地域における人口の増加に伴う廃棄物量の増大は大きな問題となっていた。当地域の廃棄物を処理する既存の施設としては、西区今宿青木に西部清掃工場が昭和47年より稼働しているが、処理能力や施設の老朽化から問題の解決の方法として清掃工場の建設がせまられていた。そのため環境局では、現在稼働している西部清掃工場に南接する地に、現工場に替わる新清掃工場を建設することを昭和61年に決定した。しかしながら工場建設予定地内に福岡市老人センター福寿園が在り、この施設を移動しなければならなかった。そのため、この福岡市老人センター福寿園を現在地より北250mの学校法人中村学園所有のグラウンドの一部を購入して、この地に新福岡市老人センターを建設することになった。しかし、中村学園は売却したために手狭になったグラウンドではグラウンドとしての機能を果たし得ないので、グラウンドの北に接して広がる学園用地の丘陵と自転車置場をグラウンド拡張のために造成することにした。

このグラウンド造成地の北東部には周知の遺跡として広石南古墳群B群1・2号墳の2基の古墳が知られていた。これまで2基の古墳は中村学園の理解で保存されていたが、今回のグラウンド拡張工事の計画においては2基の古墳とも破壊される予定であった。このため埋蔵文化財課は遺跡の現状保存を果たすべく中村学園と協議を行ったが、計画変更は困難であることから、2基の古墳は記録保存を行うことにした。ただし、1号墳の石室は学園用地内に移設し、教材資料として活用されることとなった。

2基の古墳の発掘調査は埋蔵文化財課第一係が担当し、調査に掛かる費用の全額は中村学園の負担で行われることになったのである。

2. 発掘調査の組織

調査委託 学校法人 中村学園大学

調査主体 福岡市教育委員会文化財課埋蔵文化財課

教育長 佐藤善郎

文化部長 川崎賢二

埋蔵文化財課長 柳田 純 孝 同課第一係長 折 尾 学

調査担当 二宮 忠 司 瀧 本 正 志 事務担当 岸 田 隆

調査補助 大 庭 友 子 村 上 か を り

調査協力 有田吉太 伊藤みどり 牛尾秋子 牛尾シキヨ 牛尾 豊 尾崎達也
 尾崎八重 大内文恵 金子ヨシ子 菊地栄子 菊地昭一 倉光ナツ子
 小林フミ子 白坂フサヲ 正崎由須子 惣慶とみ子 典略 初 林 嘉子
 平野ミサヲ 細川ミサヲ 真名子時雄 真名子ゆきえ 山西人美
 結城シズ 結城信子 結城千賀子 結城弥澄

資料整理 青柳恵子 尾崎京子 斎藤美紀枝 平田ミサ子 藤崎洋子 真名子順子
 渡辺ちず子

3. 発掘調査の経過

調査は昭和63年5月10日に着手し、約2ヶ月半の期間を経て昭和63年7月31日終了した。調査した古墳は2基であるが、1号墳については石室を移築復原することになっていたため、石室掘り方の基底部を明らかにすることは出来なかった。以下、調査日誌を抜粋して、調査の経過を追ってみたい。

日 誌 抄

昭和63年

- 5月10日 機材を搬入し、調査事務所を整備する。
- 11日 標高を移設する。依頼していた1号墳丘上の立木伐採が不十分なため、伐採範囲を広げると共に、伐採木のかたづけを行う。
- 25日 藤崎遺跡の調査のため瀧本は担当を外れ、二宮が調査を担当することになった。
- 27日 2号墳の墳丘遺存図を作成する。
- 6月2日 1号墳周辺の地形測量を行う。
- 14日 藤崎遺跡調査が終了したので、再び瀧本・二宮で調査を担当する。2号墳石室の実測を始める。
- 23日 1号墳石室の実測を始める。石室内は白熱燈の熱も加わり蒸し暑く、実測をしていると頭がぼやけてくる。
- 28日 1号墳の地山整形図を作成する。
- 7月31日 機材を撤収し、調査を終える。



Fig. 2 周辺地形図 (縮尺1/2,000)

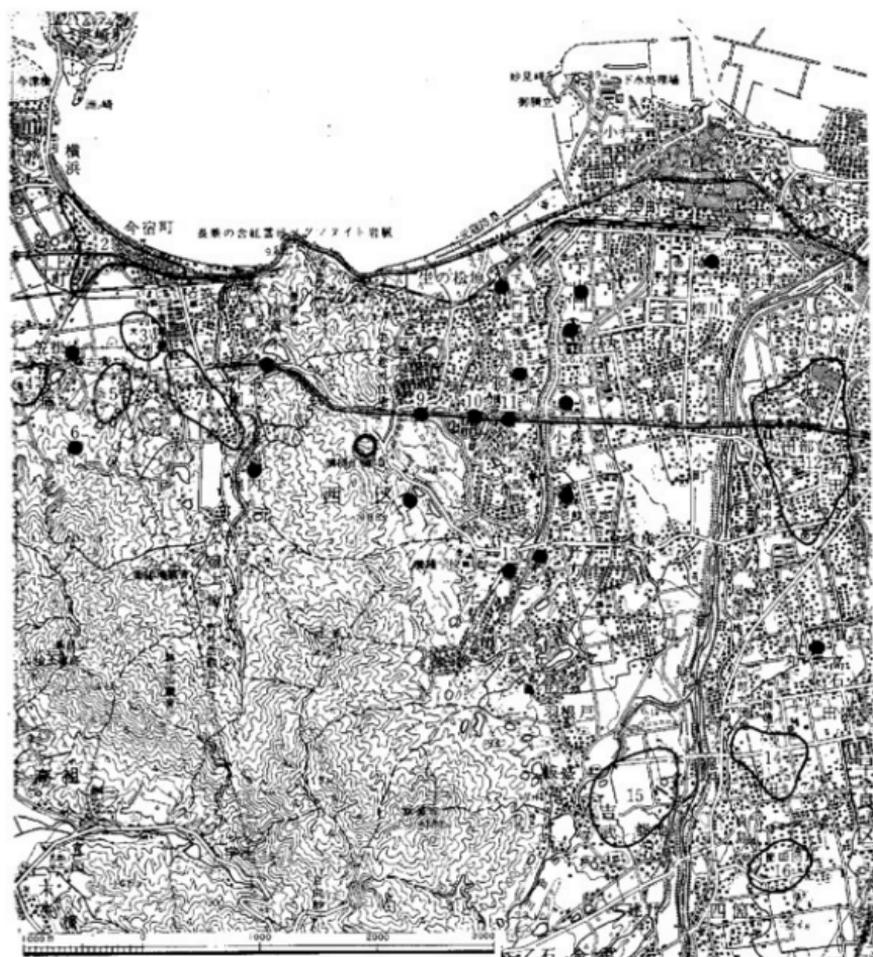


Fig. 3 周辺遺跡分布図 (縮尺1/50,000)

- | | | | |
|-------------|-----------|--------------|--------------|
| 1. 広石南古墳群B群 | 2. 今宿遺跡群 | 3. 今宿五郎江遺跡 | 4. 女原遺跡 |
| 5. 大塚遺跡 | 6. 新開窯址 | 7. 青木遺跡群 | 8. 拾六町ツイジ遺跡 |
| 9. 大又遺跡 | 10. 宮の前遺跡 | 11. 湯納遺跡 | 12. 有田・小田部遺跡 |
| 13. 野方中原遺跡 | 14. 田村遺跡群 | 15. 飯盛・吉武遺跡群 | 16. 四箇遺跡群 |

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭63九報、第397号」

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地

現在の福岡市の行政区域には、東から福岡平野・早良平野・今宿平野の三つの平野がある。これらの平野は全て博多湾に面している。福岡平野と早良平野とは油山から北へ延びる丘陵で画され、早良平野と今宿平野とは背振山より派生した山塊の叶岳・長垂山から延びる丘陵によって画されている。福岡平野と早良平野とは平野全域を示しているのに対して、今宿平野は、基本的には福岡県西北部に開けた糸島(怡土・志摩)平野に含まれるものの、糸島平野の東北部を高祖山から派生した低丘陵によって画された小平野を示している。本報告書で述べる古墳群は、この早良平野と今宿平野とを画する丘陵上に位置する。

本古墳群を構成する1号・2号墳は、早良平野の西北部、平野の西辺を画す長垂山と叶岳とが分かち谷部に位置し、叶岳から派生する標高40m前後の別々の低丘陵頂部先端に立地する。本古墳群から現海岸線までは約1.5km、今宿平野・早良平野の丘陵裾部まで約1kmをそれぞれ測る距離にある。2基の古墳の立地する丘陵の先端部には、早良平野と今宿平野とを結ぶ交通路の一つが通り、古来からの姿を今に伝えている。この糸島平野と早良平野とを結ぶ交通路は、長垂山から南方向へ広がる丘陵と、叶岳から北東方向へ広がる丘陵とに挟まれた谷筋にあたる。谷筋は、早良平野側は野方から、今宿平野側は青木からそれぞれ入り込んでいる。この両方の谷筋を画すところが“広石峠”と呼ばれる標高最高点であるが、本古墳群は、この広石峠よりやや今宿平野側の谷筋に位置する。古墳からの展望は、眼前を長垂山から延びる丘陵に遮断され、博多湾はもちろん、今宿平野・早良平野の一部でさえ望むことはできない。古墳を見ることのできるの、古墳の東側を通る交通路からだけである。

この二基の古墳を含む広石古墳群を初め、鎌崎古墳群・浅谷古墳・岩名隈古墳などの多くの古墳がこの早良地域と糸島地域とを結ぶ交通路に沿って展開している点は注目される。

2. 遺跡の歴史的環境

本古墳群を挟む今宿平野と早良平野とにおける歴史的環境は、これまで既刊の報告書に詳細に言及し尽くされているので、本文末に関係文献を列挙してこれに譲り、ここでは本調査地周辺に限定して歴史的環境を概観して見ることにする。

本古墳群が立地し、今宿平野と早良平野とを画す叶岳・長垂山山麓には扇状地形が発達している。これら扇状地には各時代の遺跡が数多く発見されている。

縄文時代の遺跡としては、これまでに明確な遺構を伴う遺跡は発見されていないが、遺物は数ヶ所から出土している。

弥生時代の遺跡としては、早良平野側で十郎川遺跡・野方中原遺跡・拾六町ツイジ遺跡・野方久保遺跡・宮ノ前D遺跡、今宿平野側で鋤崎弥生遺跡・今宿五郎江遺跡・青木遺跡等があげられよう。これらの遺跡の性格を見ると、弥生時代初めから古墳群周辺地域において、人々が田を築き、漁(猟)を行ってクニを営み、あるときは戦いを余儀なくされたようである。

古墳時代には、前期～中期において今宿平野側になる高祖山から派生した丘陵端部に今宿大塚古墳・丸隈山古墳・鋤崎古墳などの前方後円墳が、後期には今宿平野・早良平野を画す高祖山・長垂山・叶岳から開析する低丘陵地帯に高崎古墳群・広石古墳群・鋤崎古墳群等を始めとして多くの群集墳が築造されている。また、直接製鉄に関係する遺構は見つかっていないが、鉄鐔が丘陵の広範囲な地点から出土している。このことは、古墳の石室から鉄鐔が出土していることと併せて考えると、古墳時代後期の周辺地域の性格を考える上で一つの指針を示していると言えよう。

歴史時代の遺跡としては、製鉄に関係する下山門敷町遺跡、奈良時代から平安時代にかけて存続した城ノ原廃寺、決定する程の遺物は出土していないものの公的施設の存在を強く示唆する有田遺跡がある。

和名類聚抄によると、“広石峠”への入り口は、早良平野側が額田郷(野方)、今宿平野側が高祖郷となっている。この額田郷には驛傳が設置されていたことが延喜式に記されていることから、本古墳群の東を通る路は歴史時代においては官道として存在していたようである。これまでの調査では驛傳に結び付く遺構は見つかっていないが、峠の登り口付近にその存在が想定される。額田郷に驛傳が設置されている要因の一つに、広石峠の存在が十分に考えられる。

以上のように、本古墳群の立地する峠は政治・経済の通路としての歴史を経て現在にいたっている。

3. 遺跡の名称

広石南古墳群B群は二基の古墳から構成され、標高341mの叶岳山麓の北北東端に位置する。山麓部には開析されて分岐した丘陵が派生し、古墳は東方向へ延びる隣り合う丘陵の先端に、入り口が向かい合う形でそれぞれ築造されている。古墳の標高は40m前後を測る。

広石南古墳群B群の名称は、1979年に福岡市教育委員会発行の「文化財分布地図」からによる。名称は2号墳の所在する小字名を使用したものである。この広石南古墳群の南には広石古墳群が所在するが、この広石古墳群を基点にした位置的名称からは矛盾するので留意されたい。



Fig. 4 周辺古墳群分布図 (縮尺1/25,000)

1. 広石南古墳群B群 2. 草場古墳群 3. 長垂山古墳群 4. 草刈古墳群 5. 広石南古墳群A群
6. 高崎古墳群 7. 広石古墳群I群~IV群 8. 宮の船道跡1号墳 9. 野方古墳群A群 10. 野方古墳群B群
11. 羽根戸古墳群A群 12. 羽根戸古墳群B群 13. 羽根戸古墳群D群 14. 羽根戸古墳群E群 15. 羽根戸古墳群H群
16. 羽根戸古墳群N群 17. 大塚古墳 18. 鶴崎古墳 19. 瀬崎古墳群A群 20. 鶴崎古墳群B群
21. 油坂古墳群A群 22. 油坂古墳群B群 23. 新開古墳群C群 24. 新開古墳群D群 25. 新開古墳群E群
26. 谷上古墳群A群 27. 谷上古墳群B群 28. 谷上古墳群C群 29. 相原古墳群A群 30. 相原古墳群B群
31. 相原古墳群C群 32. 相原古墳群D群 33. 相原古墳群E群 34. 相原古墳群F群 35. 相原古墳群G群
36. 相原古墳群H群 37. 相原古墳群J群 38. 木村古墳群A群 39. 渡山古墳群B群 40. 広石古墳群W群
41. 笠間谷古墳群

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭63九規.第397号」

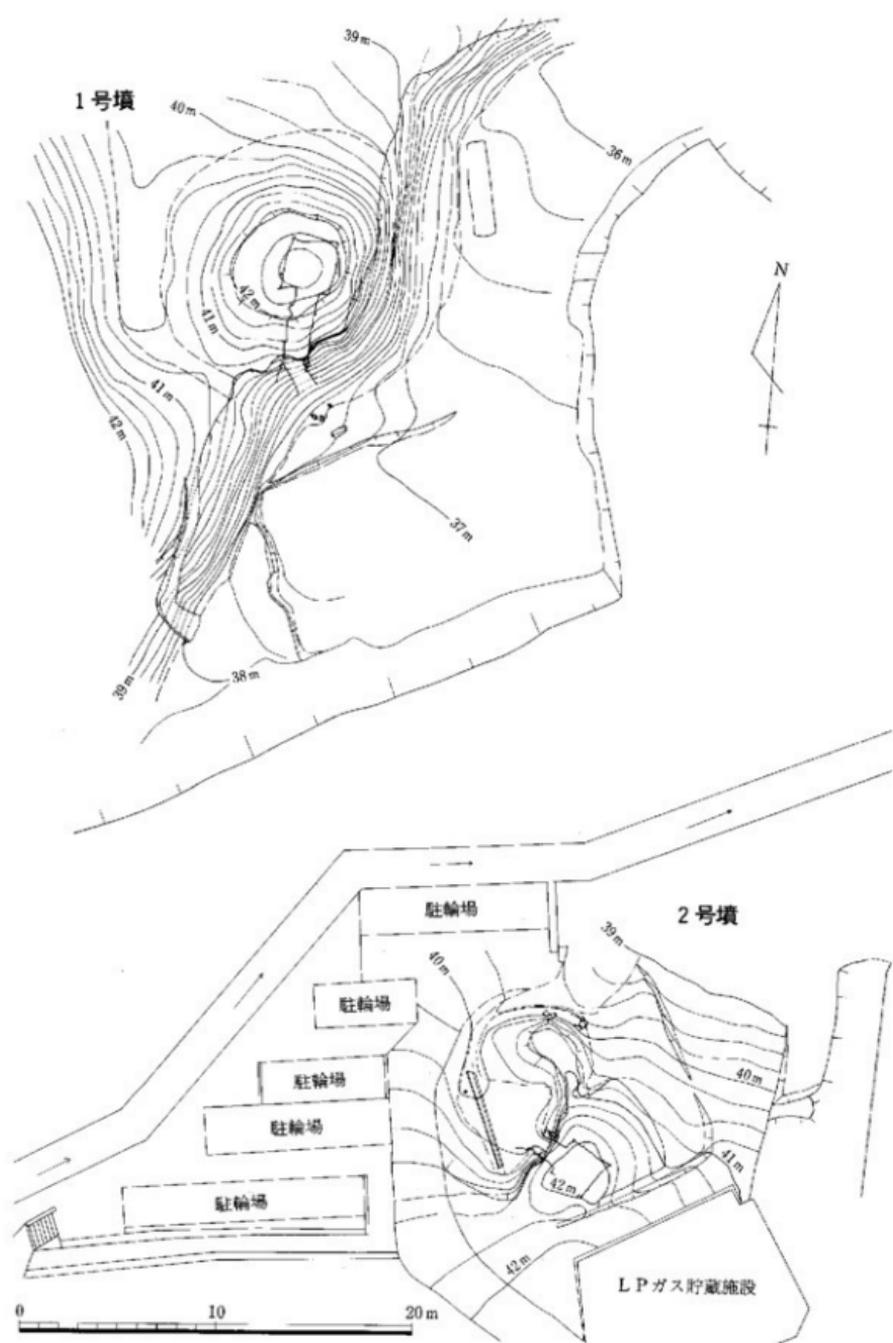
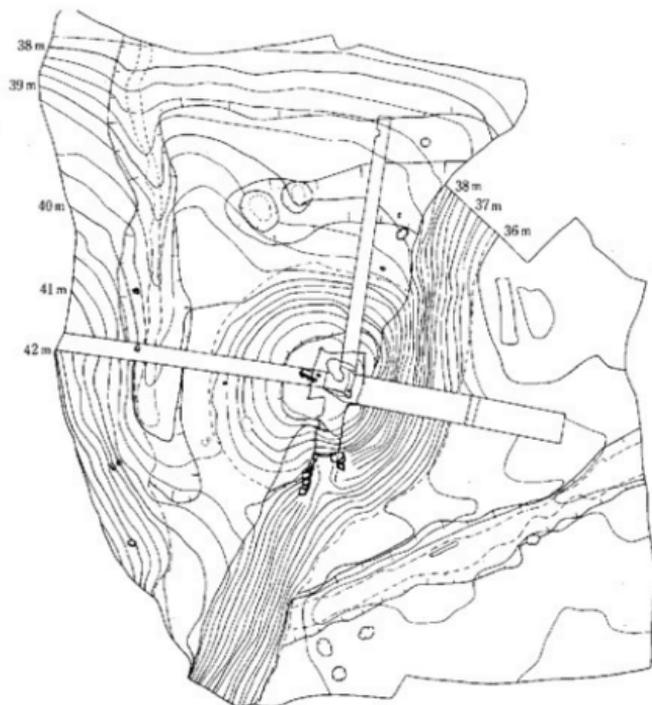
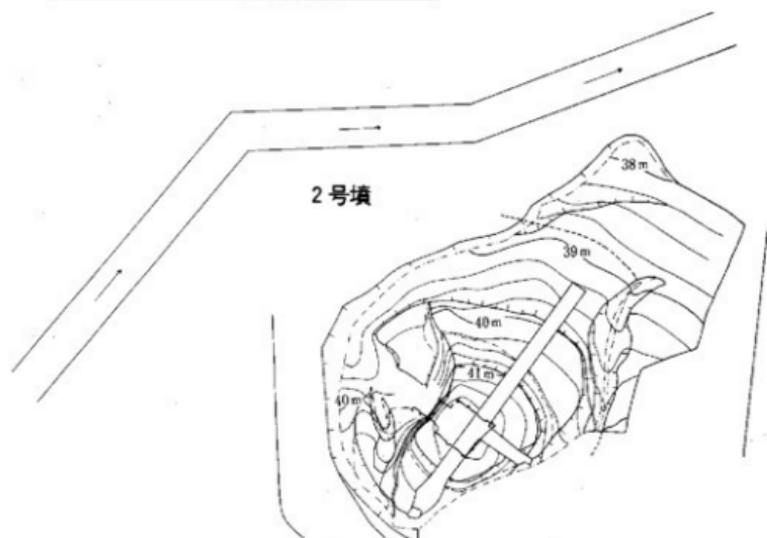


Fig. 5 古墳群地形測量図 (縮小1/300)



1号墳



2号墳

Fig. 6 古墳群墳丘遺存図 (縮尺1/300)

第3章 調査の記録

1. 遺跡の概要

広石南古墳群B群は二基の古墳から構成され、標高341mを測る叶岳山麓の北北東端に位置する。山麓部には開析されて分岐した丘陵が派生し、古墳は東方向へ延びる隣り合う丘陵の先端に、入り口が向かい合う形でそれぞれ築造されている。古墳の標高は40m前後を測る。

二基の古墳のうち北に位置する1号墳は、主体部に単室の両袖型横穴式石室を有する、墳径約15mの円墳である。主体部の石室は、丘陵尾根筋に直行するように築造され、南に開口している。墓道の全てと羨道及び墳丘の一部は後世の削平によって欠失し、石室内部は擾乱されていた。数少ない出土遺物から検討すると、1号墳は6世紀後半～末にかけて築造されたようである。石室規模や追葬の有無等、不明な点は多い。

2号墳は1号墳から南に50m離れた別丘陵に位置する。主体部に単室の両袖型横穴式石室をもち、約13mの墳径を測る円墳である。主体部の石室は、丘陵尾根筋に直行するように築造され、北に開口している。墳丘の大半は既存施設の建設時に埋没したり、削平を受けている。石室も玄室と羨道部の一部が残るだけである。前庭部においては、墓前祭祀が行われたことを伺わず痕跡が認められた。出土遺物から2号墳は6世紀後半～末にかけて築造されたようである。石室規模や追葬の有無等、不明な点は多い。

2. 第1号墳

位置と現状 (Fig. 7 PL. 3) B群を構成する2基の古墳の中で、北側に位置する1号墳は東方へ延びる丘陵部先端の頂部に位置する。古墳西側の斜面は急勾配を呈しており、古墳築造時における地山整形が大掛かりであった事をうかがわせる。墳丘の東半部は崖状を呈し、裾部は平坦地が広がっていることから、後世の削平による墳丘の欠失が想定された。調査前には人の手によって荒らされていない古墳ということであったが、既に墳丘の南側には人が出入りできるほどの穴が開き、羨道の天井石が露呈・崩落寸前様の相を呈していた。石室内部の床面には至る所に掘り穴が残り、盗掘の激しさを物語っていた。残存する墳丘は2mほどの高まりを示し、雑木に覆われていた。

a. 墳丘

地山整形 (Fig. 9 PL. 9) 本墳は丘陵尾根筋に直交する位置関係で石室を構築している。したがって、古墳築造のための地山整形は、丘陵先端部をほぼ横断する溝の掘削と溝の東側、すなわち古墳基底面の整地という二つの作業からなる。墳丘西側に残る丘陵斜面は急勾配

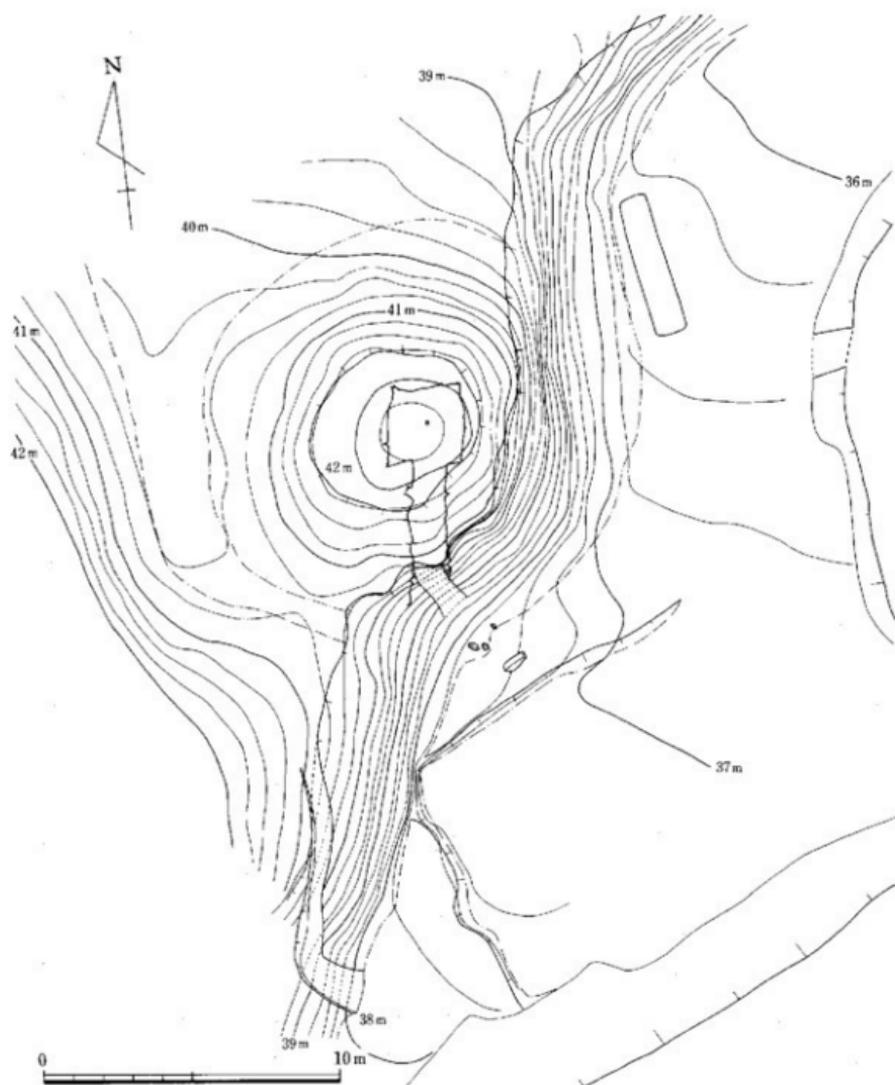


Fig. 7 1号墳現況測量図 (縮尺1/200)

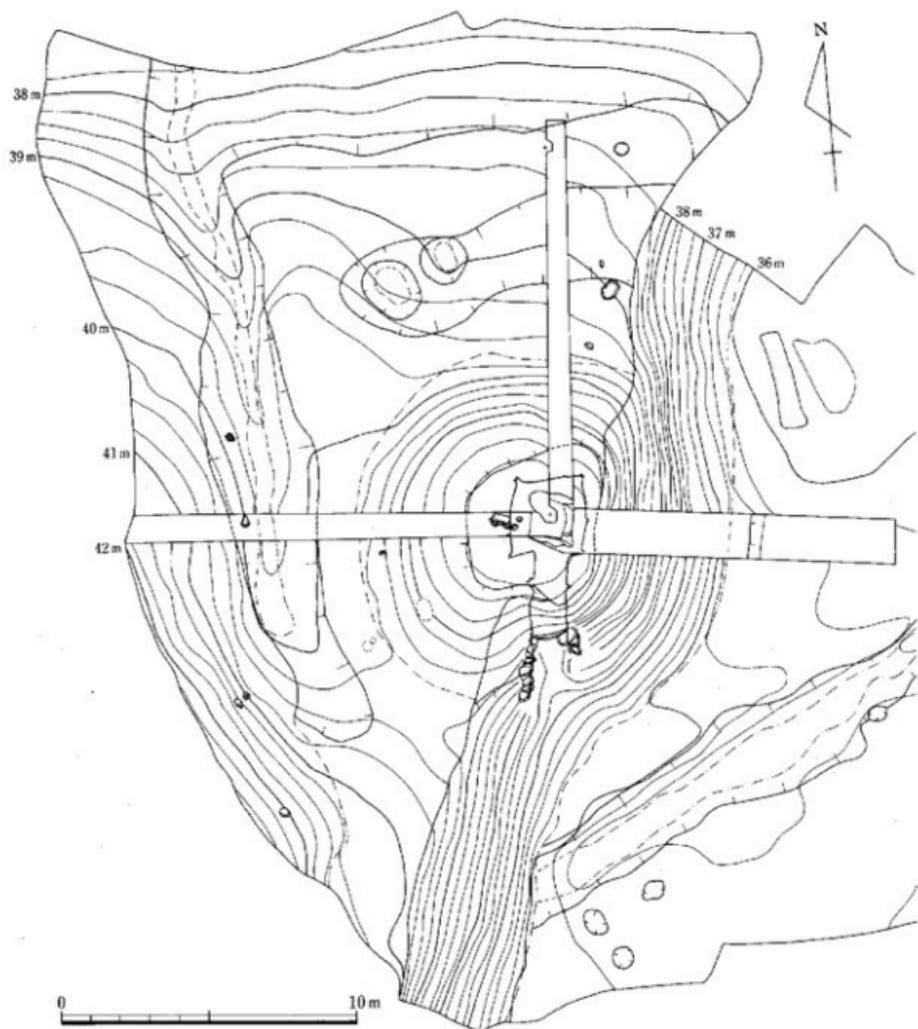


Fig. 8 1号墳丘遺存図 (縮尺1/200)

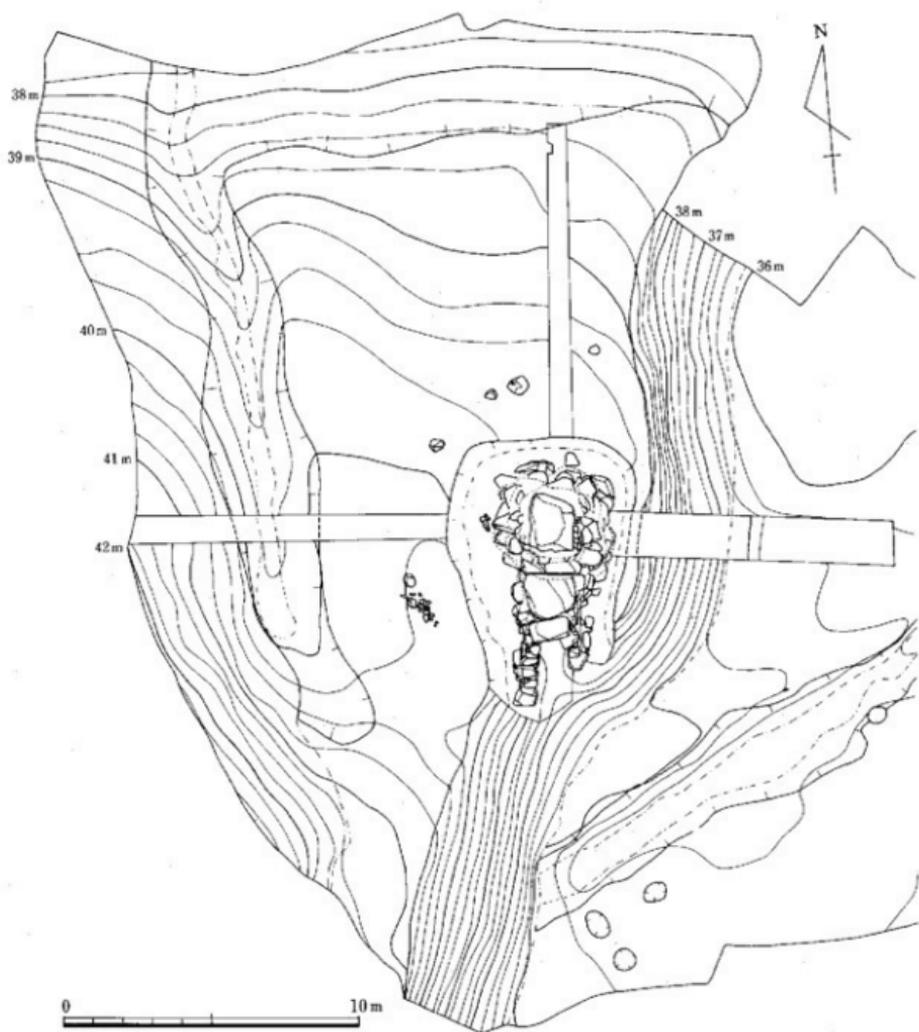


Fig. 9 1号墳地山整形図 (縮尺1/200)

を呈し、丘陵の掘削が大規模に行われたことをうかがわせる。溝は削平した丘陵斜面と古墳基底面の変換点に沿って直線的に開削され、その流れは丘陵北の谷筋にいたる。溝の規模は幅2.5～3m・深さ0.4mを測り、溝壁は弧を描き立ち上る。古墳基底面はテラス状に削り出しているものの、北側に緩やかに下る緩斜面を呈し、溝のこうばい方向と同じくする。墳丘の東・南部が欠失しているため、基底面本来の広さを知り得ない。

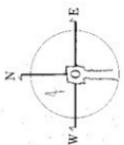
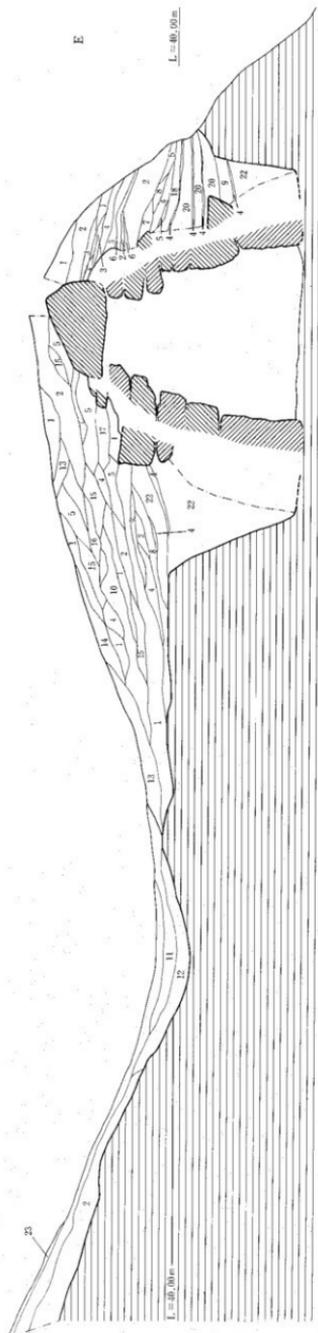
墳丘 (Fig.10 PL.8) 本墳は後世の削平により墳丘の東・南部、および頂部が欠失し、古墳築造時の姿を残していないが、残存する墳丘から営造時の規模、築造技法を十分に復原することが可能である。営造時の墳丘は東西トレンチにおける封土の状況から、直径13～15m・墳高3～4mの規模が想定される。墳丘の封土は第一義的には古墳の外形を形作るものであるが、その性格から壁石の裏込み的なものと、墳丘の成形的なものに大別されることは本墳においても明らかである。さらに壁石の裏込み的性格の封土も、ほぼ古墳基底面を境として二つに分かれる。ほぼ古墳基底面より低い部分、すなわち石室掘り方内における壁石（腰石）の裏込みの場合は、深さ2mの掘り方にわたって層厚1cm程の白色砂と暗褐色土との互層が連続して叩き締め、突き固められている。これに対して古墳基底面より上部の墳丘は、Fig.10に示すように層厚10～20cmを測る封土が雑然と置かれて形成されている。この墳丘封土の異なりは、石室の腰石を安定させることに力が注がれていた事を示すと共に、古墳築造のポイントが腰石の据付けにあることを示していると言えよう。

b. 横穴式石室

本墳の主体部は、主軸をN-5°-Eにとり、南に開口する単室の両袖型横穴式石室である。玄室、羨道および閉塞施設の一部を検出したが、羨道端部および墓道は削平を受けて残存していない。石室構築の石は調査地周辺で産する花崗岩の一種が多く用いられているが、多くの石に亀裂が認められ、強度は低いことがうかがえる。

玄室 (Fig.11 PL.12～15) 奥壁幅2.2m、前幅2.4m、左・右壁長2.6m、天井高2.7mを測る。奥壁は1.7m×2.5mの巨石を鏡石として用いている。両壁は、それぞれ二個の巨石を腰石とし、腰石を含め6段の石積みで構築されている。石積みの方法は下2段は広口積み、3段目から5段目までは横口積みが主体、最上段の6段目は小口積みとなっている。6段目に関して言えば直接石室を構成すると言うよりも、天井石のすわりを良くするために用いられている。総じて石積みの目地は直線を成してないが、石積みは一段ごとに行われたことが右側壁の状況からうかがえる。天井石は2m×1.5mを呈する石一個からなる。

玄室床面は攪乱により構築時の状況を全くとどめていない。僅かに地山面上で数個の扁平な石を確認したが、床面の確定、敷石や追葬の有無を確認するには至っていない。また、排水施設なども同様である。



- 1. 茶褐色土
- 2. 暗黄褐色土
- 3. 白色砂质茶灰色土
- 4. 暗褐色土
- 5. 黄褐色土
- 6. 白色粗砂质茶灰色土
- 7. 白色粗砂质黄褐色土
- 8. 棕色土
- 9. 白色粗砂质暗褐色土
- 10. 茶灰色土
- 11. 腐黄灰色土
- 12. 黑色土
- 13. 暗茶灰色土
- 14. 暗茶褐色土
- 15. 黄灰色土
- 16. 暗黄灰色土
- 17. 暗黄褐色土
- 18. 白色粗砂与黄褐色腐质土之互层
- 19. 白色砂质黄褐色土
- 20. 白色粗砂质茶灰色土
- 21. 明黄灰色土
- 22. 白色砂与暗褐色土之互层
- 23. 表土

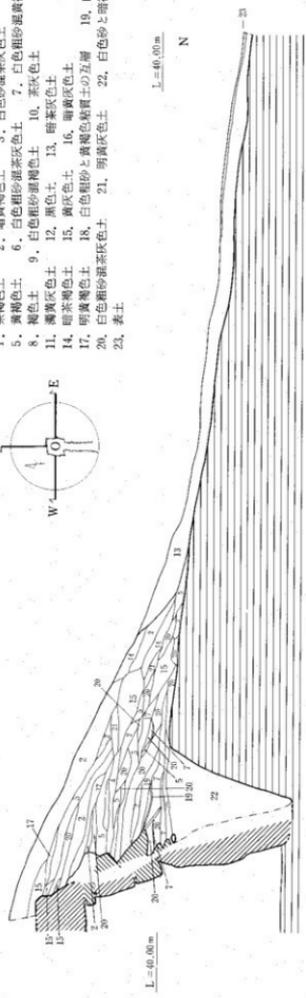


Fig. 10 1号墳丘土層図 (縮尺1/60)

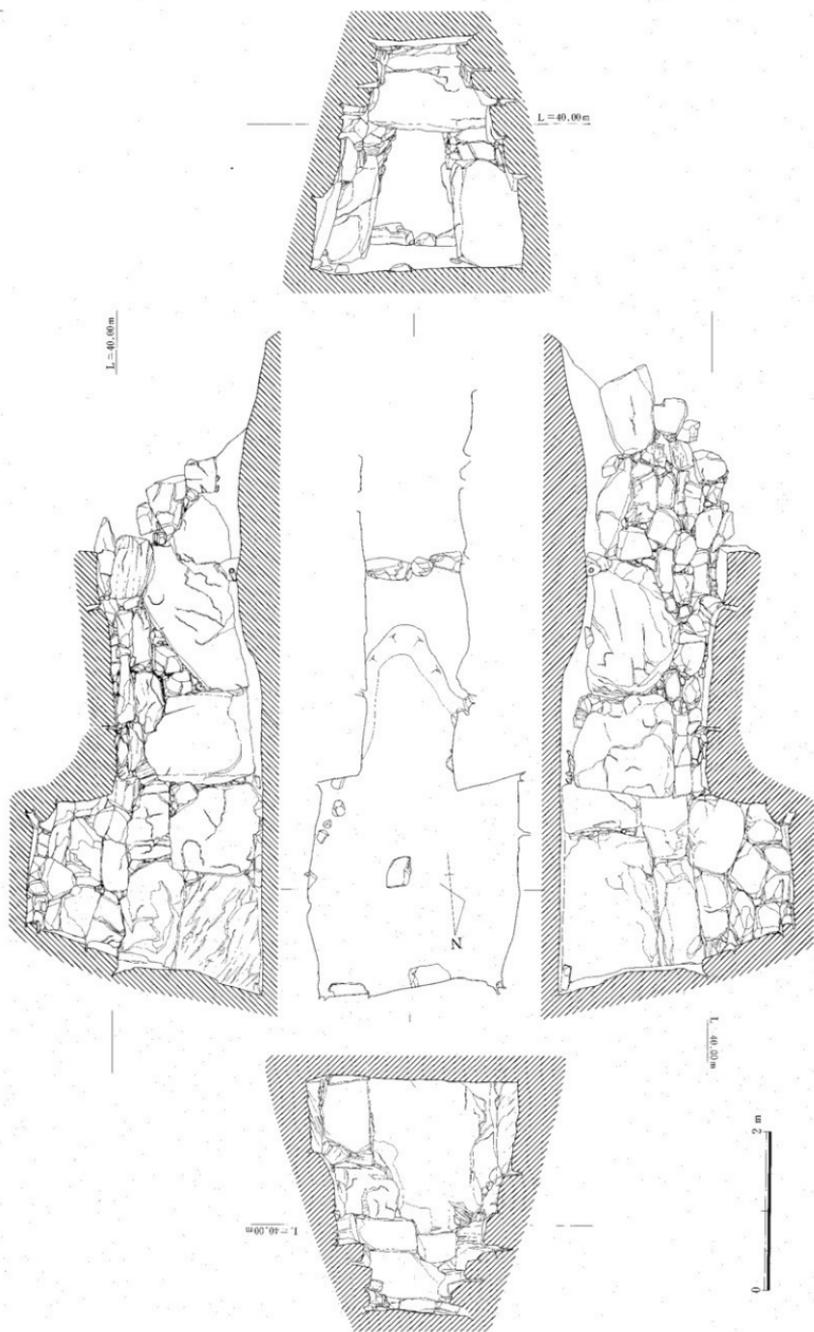


Fig. 11 1号紫石室断面図 (縮尺1/50)

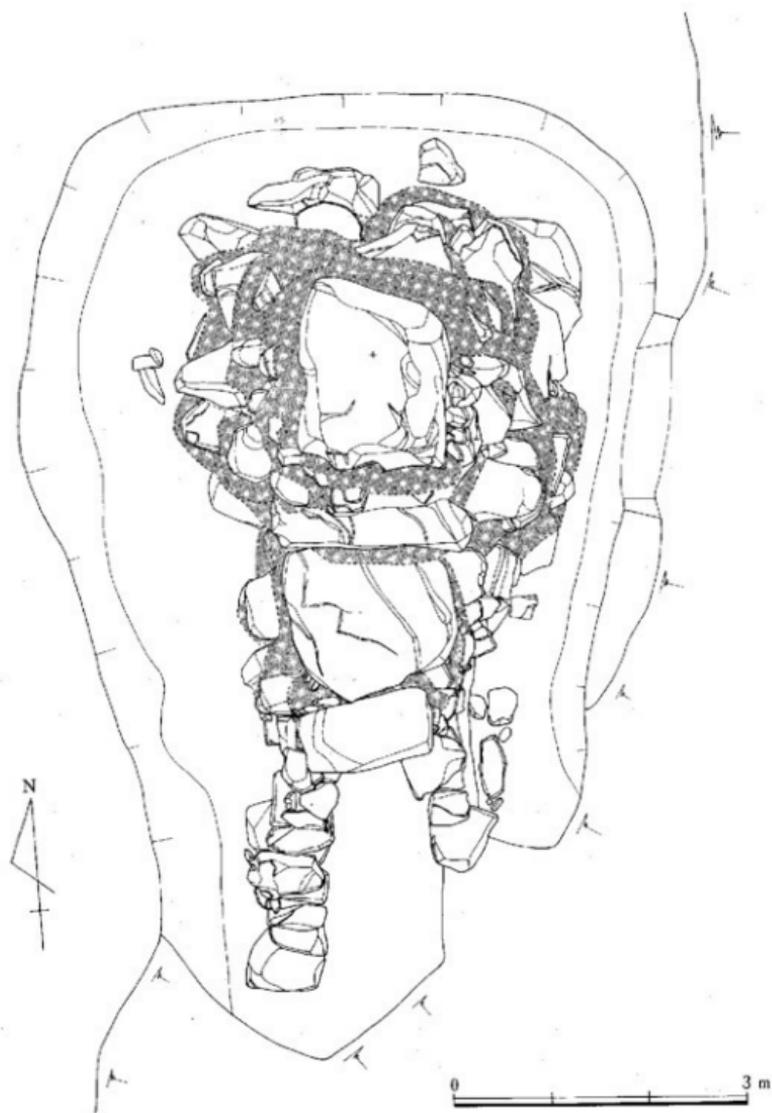


Fig. 12 1号墳平面図（縮尺1/60）

羨道 (Fig.11) 幅は玄門で1.1m、羨道端近くで1.2mを測り、側壁は右側壁長4.2m、左側壁長5.4m残存する。玄門から羨道端へ2.8mの地点に第一梱石が認められる。この第一梱石を境にした羨道の手前と奥とは、左右の側壁の石積み構成に大きな差異が認められる。梱石より奥側では玄室で認められる巨石と同規模の石を腰石としているのに対して、手前側でははるかに小さい石を積み上げるだけである。玄門部においては第二梱石は認められない。しかし、第一梱石の設けられている床面高が38.4mであるのに対して、第二梱石の存在が十分に想定される玄門においては38.1mまで攪乱を受けている点から考えると、築造当初には存在していたと考えるのが妥当であろう。さらには側壁の在り方から、玄門から第一梱石までの間を副室的な空間として捉えられよう。第一梱石における天井高は1.8mを測る。天井石は五個残存していたが羨道端側の石が崩落しかなり危険なために排除した。これら天井石は、腰石の上位に横口積みで二段石積みした後に据付ている。

閉塞施設 (Fig.13 PL.5) 閉塞施設は第一梱石から羨道端部にかけて長さ2.5mにわたり残存していた。羨道端部は欠失しているので全容は知り得ない。石積みの方法は次のように推察される。1. 梱石に底辺1m・高さ0.8m・厚さ0.2mを呈する三角形の板石をもたせかけるように立てて扉石とする。2. 一抱え程の石二個を扉石の外側に連続して据付けて扉石の安定を図る。3. 人頭大から拳大の石を積み上げる。しかしFig.13に示すように地山床面と石積みとの間には20~30cmの厚さを測る土層が認められる。これは一つに迫葬の可能性を示唆するものかもしれない。

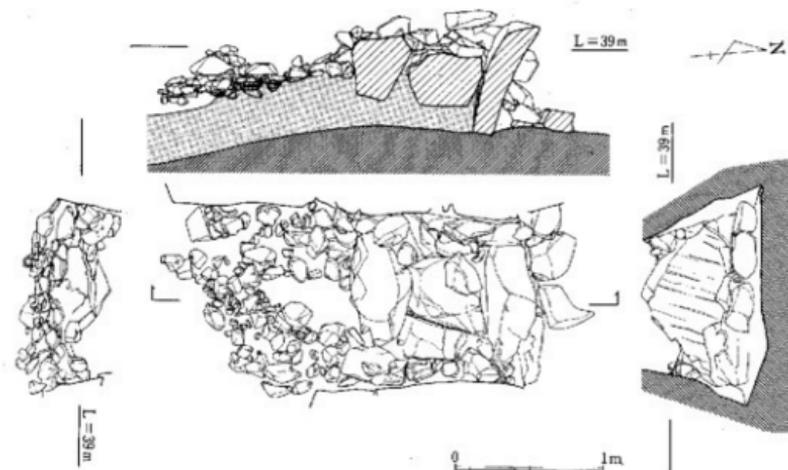


Fig. 13 1号墳羨道部閉塞状況図 (縮尺1/40)

c. 出土遺物

1号墳における遺物の出土量はコンテナ2箱を数えるが、その大半は墳丘と羨道閉塞部からである。玄室内からの遺物の出土量は周辺の同時期の古墳と比べて極端に少なく、調査前の玄室の攪乱が盗掘によるものであることを遺物の出土量から裏付ける結果となった。

遺物は須恵器・土師器の土器類と馬具の鉄器、古墳の築造とは関係しない石器である。本報告書に掲載した遺物の出土場所は下記の表に示した通りである。

		玄 室	羨 道	羨道閉塞施設	墳 丘
土 器	土師器	01020		01021 01022 01024	01025 01026
	須恵器	01001 01008	01002	01004 01005 01006 01023	01007 01009 01010 01012 01013 01019
鉄 器	馬 具		01060		
石 器					01080 01081

次に遺物個体ごとに報告する。

土師器 (Fig.14 PL.16)

小型埴 (01026) 口径5.4cm、底径2.8cm、高さ4.2cmを測る、てづくねの土器である。体部および口縁部は指押さえて整形・調整している。

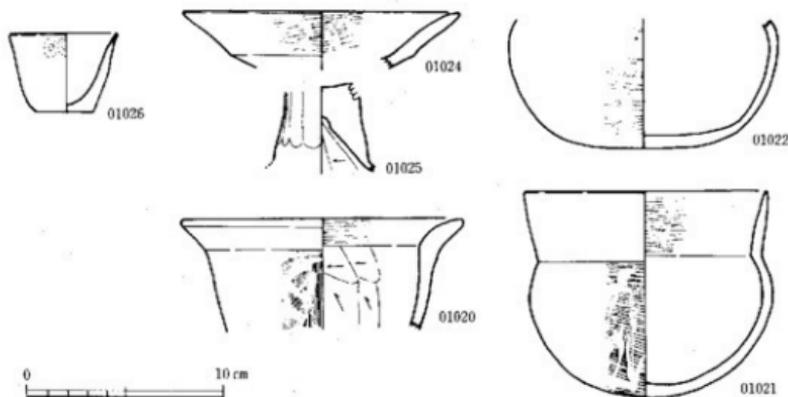


Fig. 14 1号墳出土遺物実測図(1) (縮尺1/3)

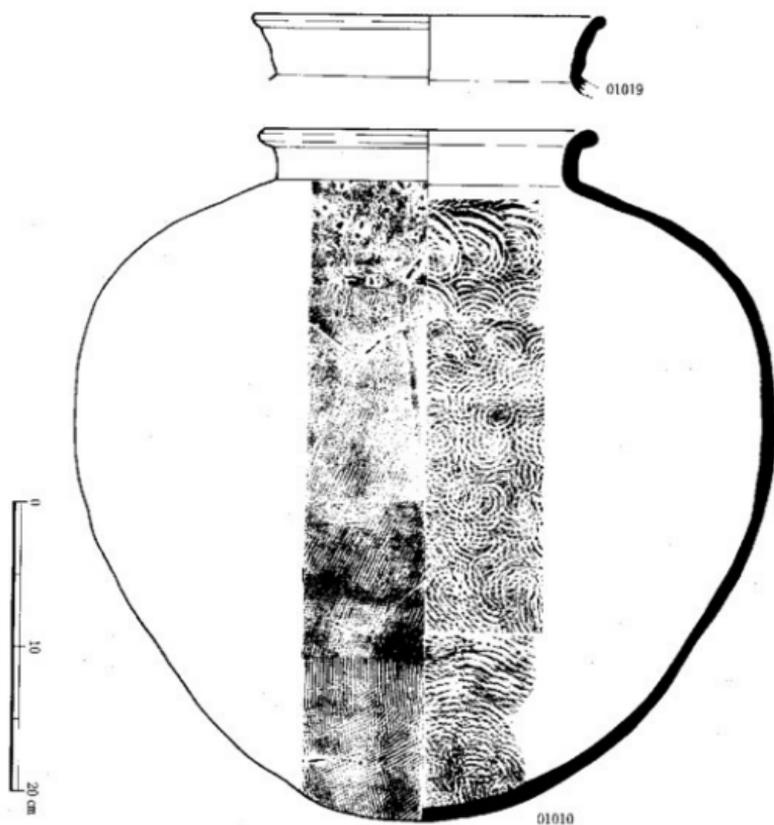
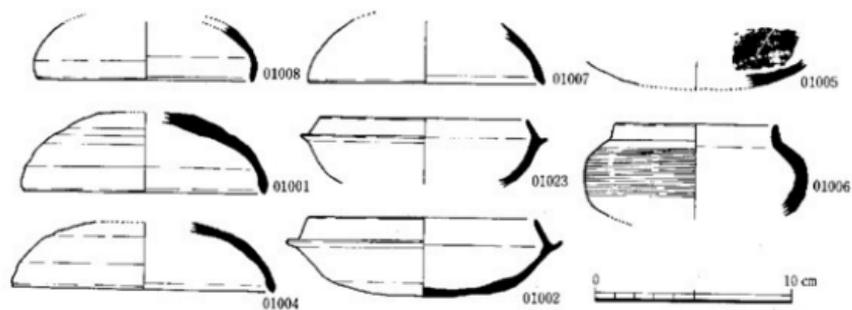


Fig. 15 1号墳出土遺物実測図(2) (縮尺1/3・1/4)

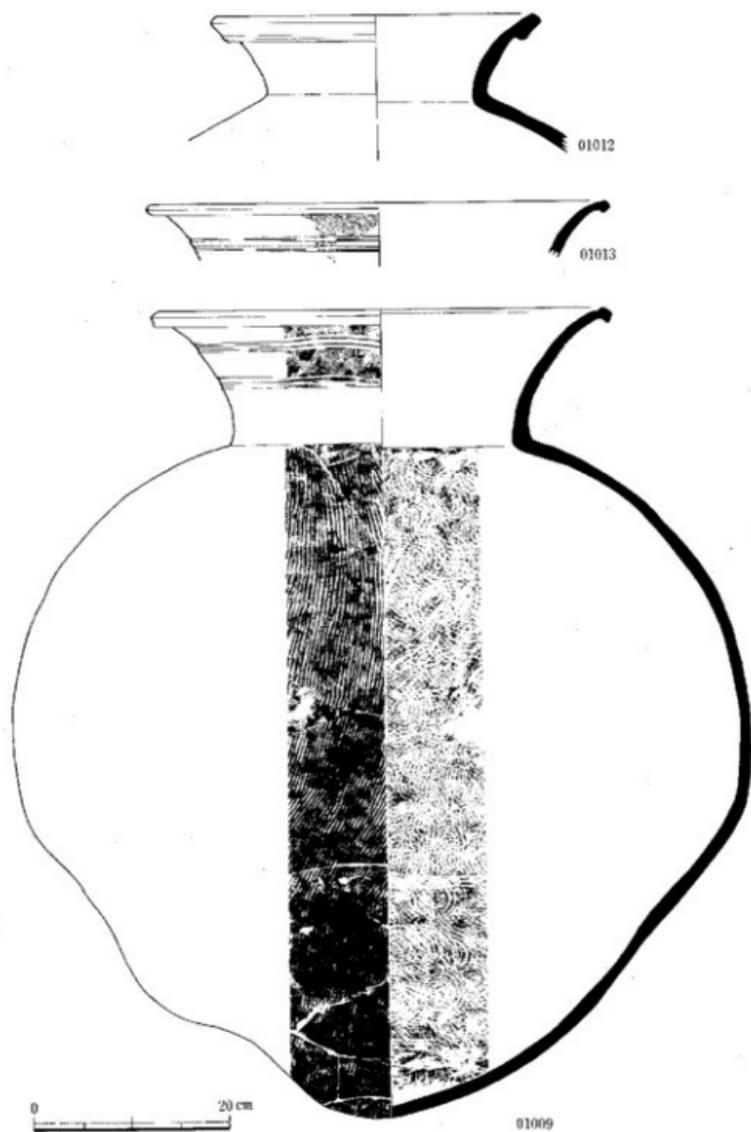


Fig. 16 1号填出土遺物実測図(3) (縮尺1/6)

高坏 (01024・01025) 高坏の坏部と脚部が出土している。坏部の破片は口縁部で、器面両面にヘラ磨き調整の跡をよく残す。脚部の破片も全形を知ることは出来ないが、器面両面にヘラ削りしている。01024の復原口径は14cmを測る。

埴 (01021・01022) 2個体出土している。01021はほぼ完形で、全形を知り得る資料である。底部・体部は球状を呈し、口縁部はやや外反しながら直線的に立ち上がる。器面内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。01021は口径11.4cm、器高10.7cmを測る。

甕 (01020) 口径14.6cmが復元できる破片である。口縁は「く」の字状に外反し、端部は丸く仕上げている。体部内面はヘラ削り、外面は縦方向の刷毛目調整している。口縁部は内面に横方向の刷毛目を施した後に、内外面とも横ナデで仕上げている。

須恵器 (Fig.15・16 PL.16・17)

坏蓋 (01001・01004・01007・01008) すべての出土資料は破片である。天井部と体部との境は明瞭でない。天井部外面は、頂部のみ回転ヘラ削りし、他はナデで仕上げている。口縁端部は横ナデで丸く仕上げているのが大半を占めるが、01007は内傾する面を持ち、外面にはヘラ記号の一部が認められる。口径は11.8cm～13.1cmを測る。

坏 (01002・01005・01023) 01002は口径11.4cm・器高4.1cmを測る完形品である。胎土は0.5mm程の砂粒を僅かに含むが精選され、暗青灰色の色調を呈している。底部外面は回転ヘラ削り、内面はナデで仕上げている。01005は小片で全形を知り得ない。胎土は1mm程の砂粒を多く含み、青灰色の色調を呈している。内面にヘラ記号を持つ。01023は土師質の須恵器で、灰褐色の色調を呈している。器面は剝離して調整は不明である。口径は10.4cmを測る。

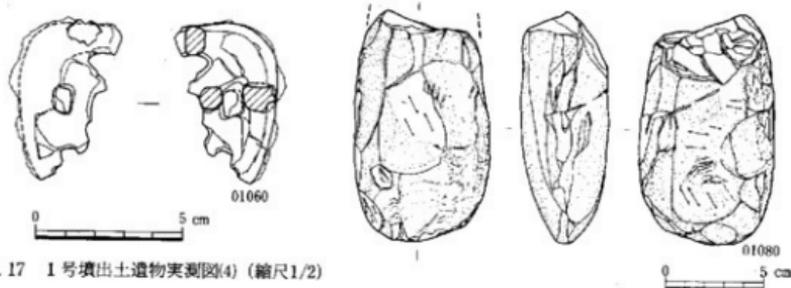


Fig. 17 1号墳出土遺物実測図(4) (縮尺1/2)

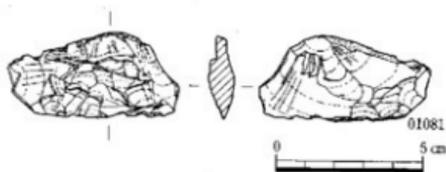


Fig. 18 1号墳出土遺物実測図(5) (縮尺1/2・1/4)

埴 (01006) 口縁・体部の破片で全形は知り得ない。体部は球状を呈し、口縁は直立するも短い。底部外面は回転ヘラ削り、体部はカキ目で仕上げている。口縁部は横ナデで仕上げている。口径は8.2cmを測る。

甕(01009・01010・01012・01013・01019) 口縁部の違いから二つに分類される。一つは01010・01019で、01010に代表される小型の甕である。口縁は直立ぎみに立ち上がり、端部は丸く仕上げている。体部内外面には当て具、叩き板の刻み目がそのまま残り、ナデ消しなどの仕上げは行われていない。他の一つは01009・01012・01013で、01009に代表される大型の甕で、口縁部は大きく外反しながら立ち上がる。口縁外面の上段と下段に沈線が施され、間を櫛目による波状文が占めている。体部内外面には当て具、叩き板の刻み目がそのまま残り、ナデ消しなどの仕上げは施されていない。

その他の遺物 (Fig.17・18 PL.17)

鉄器 (01060) 羨道部から出土した鉄片である。馬具の鏡板の破片と思われる。

石斧 (01080) 墳丘埋土から出土した。器面には研磨した部分が認められるものの、成形段階の割り面を残していることから、未完成品であろう。

スクレイパー (01081) 石斧と同じく墳丘埋土から出土した。刃部はリタッチで作り出している。

遺物番号	挿図	図版	種類	特徴	出土遺構	
01001	Fig. 15	PL. 16	須恵器・坏蓋	ヘラ記号「×」	1号墳玄室	
01002	Fig. 15	PL. 16	須恵器・坏身		1号墳羨道	
01004	Fig. 15	—	須恵器・坏蓋		1号墳羨道閉塞施設	
01005	Fig. 15	PL. 16	須恵器・坏身		1号墳羨道閉塞施設	
01006	Fig. 15	—	須恵器・埴		1号墳羨道	
01007	Fig. 15	—	須恵器・坏蓋		1号墳墳丘	
01008	Fig. 15	PL. 16	須恵器・坏蓋		ヘラ記号	1号墳玄室
01009	Fig. 16	PL. 17	須恵器・甕			1号墳墳丘
01010	Fig. 15	PL. 16	須恵器・甕			1号墳墳丘
01012	Fig. 16	—	須恵器・甕			1号墳墳丘
01013	Fig. 16	—	須恵器・甕	1号墳墳丘		
01019	Fig. 15	—	須恵器・甕	1号墳墳丘		
01020	Fig. 14	PL. 16	土師器・甕	1号墳玄室		
01021	Fig. 14	PL. 16	土師器・埴	1号墳羨道閉塞施設		
01022	Fig. 14	PL. 16	土師器・埴	1号墳羨道閉塞施設		
01023	Fig. 15	—	須恵器・坏身	1号墳羨道閉塞施設		
01024	Fig. 14	—	土師器・高坏	1号墳羨道閉塞施設		
01025	Fig. 14	—	土師器・高坏	1号墳墳丘		
01026	Fig. 14	PL. 16	土師器・埴	手捏ね	1号墳墳丘	
01060	Fig. 17	PL. 17	鉄器・馬具		1号墳羨道	
01080	Fig. 18	PL. 17	石器・石斧		1号墳墳丘	
01081	Fig. 18	PL. 17	石器・スクレイパー		1号墳墳丘	

Tab. 1 1号墳出土掲載遺物一覧表

3. 第2号墳

位置と現況 (Fig.19 PL.18)

本古墳は1号墳の南南東約50mの所に位置し、間に谷部を挟む。海拔標高42mを測る尾根端部に位置し、石室は北西に開口する。羨道部は水路建設時にブルドーザーによる破壊を受けており、右側2枚の腰石を残すのみで左側羨道・天井石等は残存していなかった。閉塞施設も第1柵石上部の2～3個の閉塞石を残存するのみであった。玄室への入口が1号墳に向けて大きく開口していたため、玄室への浸入は容易な状態であった。

墳丘は比較的高く、北東側谷部に向け緩やかな傾斜をなす。南東側墳丘はプロパンガス貯蔵庫建設時に、又南西側墳丘は道路・駐輪場建設時に破壊を受けている。北西側墳丘も水路・道路建設時の破壊を大きく受け、墳丘裾部の残存は北東のみであった。

a. 墳丘

地山整形 (Fig.20・22 PL.24・25)

北側斜面の尾根端部に位置するが調査区域が限定されたため、周溝・墳丘の全貌を明らかにすることは出来なかった。本古墳の南側を階段状に平坦面を造り出し、北西側に開口する石室構造で長さ7m、幅4.7m、深さ1.8mの掘方を呈する。北・東の一部も平坦面を造り出し、他はほぼ地山を残しそのまま斜面となる。南・西側は調査区域外と道路建設等の破壊部分のためその全容を知ることは出来なかったが、東側に一部その痕跡を残す溝があり、おそらく馬蹄形状を呈する周溝と考えられる。腰石部分には布掘り状の掘方が検出された。中央部分に土塊状の掘方を検出したが、これは後世の擾乱で石室掘方とは異なる。

墳丘 (Fig.20・21 PL.19・22)

墳頂部及び北東側墳丘の遺存は、比較的良好な状態にあるが、南東側墳丘はプロパンガス貯蔵庫建設時に、又北側及び西側は、道路・駐輪場建設時に破壊を受けておりその殆どを消失している。墳丘の構築は、まず第1段階として石室の掘方部に配した腰石の固定後、壁石の裏込めとして10～30cmの間隔で交互に叩き締めながら、壁石の積み上げに平行して盛り上げている。

これは掘方底面より右壁で約1.5m、左壁で約1.6mの高さまで達し、幅は右壁で約1.8m、左壁で約1mと掘方壁面まで達する。

掘方底面は、石と粘土で突き固めこの上部に腰石を配している。又腰石より外側の部分に平石を配し腰石の安定を図っている。

第2段階は石室天井部を覆う盛り土・及び墳形を整えるものである。第1段階に比べて層も厚く覆い2～3層かなる。腰石よりもかなり小ぶりの割石を使用した石室上部は、石と石の間に粘土及び小石等を埋め込み安定させた上で盛土している。

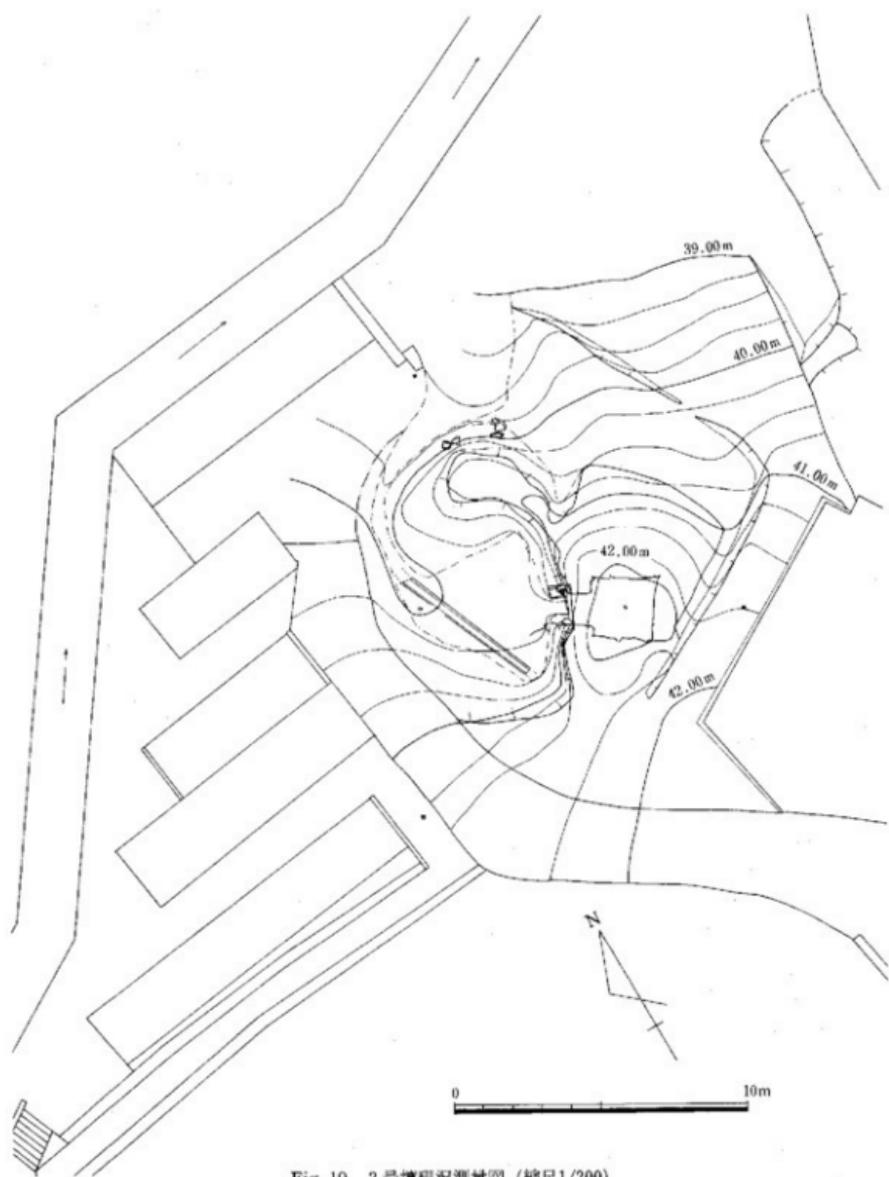


Fig. 19 2号墳現況測量圖 (縮尺1/200)

土層 (Fig.20 PL.23・24)

墳丘に2方向のトレンチを設定し、石室より右側をAとし左側をBとした。又石室奥壁側をCとし石室入口側をDとした。墳丘構築の壁石の裏込めである第1段階では、掘方内壁側に15cm位の浅い布掘りを行った後、これに粘土及び小礫で硬く突き固め、腰石を配している。さらに腰石の安定を図るため、その外側に平石を配し裏込めとして真砂と粘土の互層を突き固めている。この互層は約10cmを単位として、その割合は真砂3に粘土1の濁黄褐色土である (Fig.20のVI層に当たる)。一部には粘土のブロックが多量に含まれ均一な互層を成していない。この層はA側で約0.8m、B側で約1m、C側で1.3mまで埋められている。これらの上層にはA側とB側では若干の違いはあるが、基本的には基盤土となる灰色砂土とそれ以外の土を交互に投入して突き固めている。C側では灰色砂土約10cm、暗黄褐色土約7cmの順で1段づつ突き固め、第1段階最上層の黄褐色土を含む7段から成る約0.7mの層を造り出している (Fig.20土層名I・II層にあたる)。

A側もC側同様暗黄褐色土と灰色砂土の互層であるが、C側ほど均一な互層を成していない。石室掘方外側の上より掘方内IV層上に暗黄褐色土を埋めて傾斜を造り出し、その傾斜より掘方内に灰色砂土・暗黄褐色土の順で埋め1段ごとに突き固めている。この互層は6段まで続き約0.8mの厚い層を造り出している。

第2段階では、横方向に積み上げられた石材と石材の間に小石と粘土を埋め込み固定させた上で暗黄褐色土を約0.8m盛り上げ墳丘としている。

A側では石室主軸線から約3mの地点で外側に攪乱を受けており、墳丘裾部の確認は出来なかった。B側では墳丘裾部の遺存状態が良く石室主軸線より約8.3mまで達する。又C側斜面はプロパンガス貯蔵庫建設時に破壊されているものの墳丘裾部は遺存しており、石室掘方の上部より約1mの所に位置する。第1段階に比べ層が厚く一気に墳頂部までを埋め尽している。墳頂部は玄室内掘方より約2.6mの高さを持つ。

石室俯瞰 (Fig.24 PL.23・24)

羨道部の天井石・左側の側壁は全て破壊され、辛うじて右側壁の腰石2個が残っていたに過ぎない。しかし玄室は天井石まで完全に残っていた。羨道部は完全なまで破壊を受けているため推測するしかない。恐らく3枚の腰石を配していたと思われ、2.9mの長さを有し、天井高は玄室天井高から推定すると約1.0m前後と考えられる。玄室の天井石は3枚から成る。最上部の天井石は1.5×1.1mの1～2tの平たい花崗岩を配し、周辺を粘土と小石で根占をしている。壁面の石組みは小口積みがほとんどである。花崗岩の角・円礫を使用しているため玄室内の石面は不揃いである。奥壁側は腰石を含め3枚、左壁面は5枚、右壁面は6枚の平たい花崗岩で形成されている。腰石は内側に向かって傾斜するが、腰石と腰石の底辺を結ぶ線上からの角度は左壁・右壁とも72度で二等辺三角形を呈する。奥壁側の角度も左右壁と同様に72度を測る。

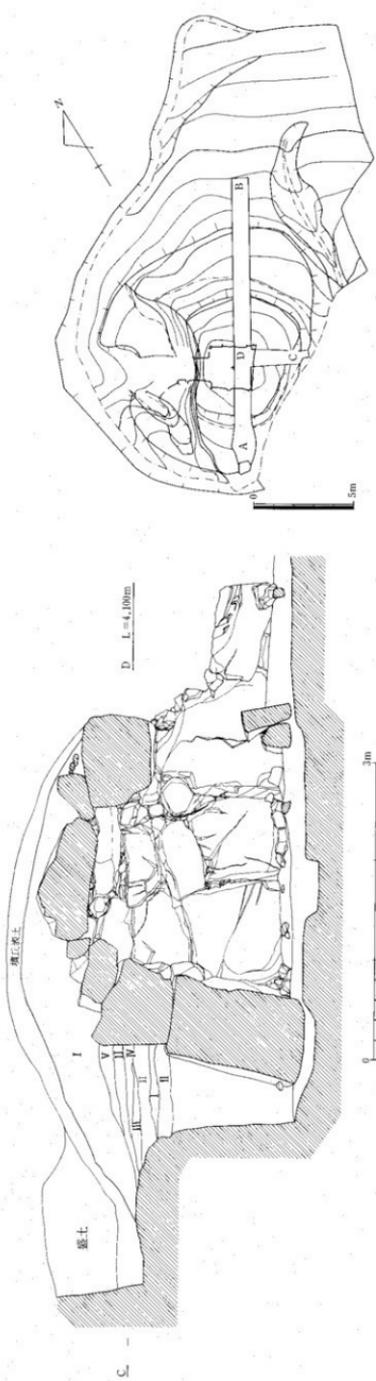
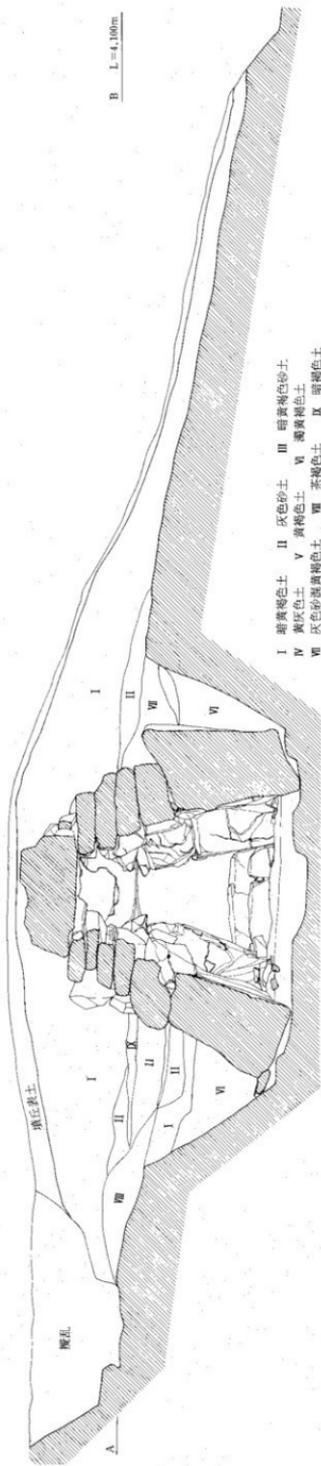


Fig. 20 2号墳土層断面図 (縮尺1/40、1/200)

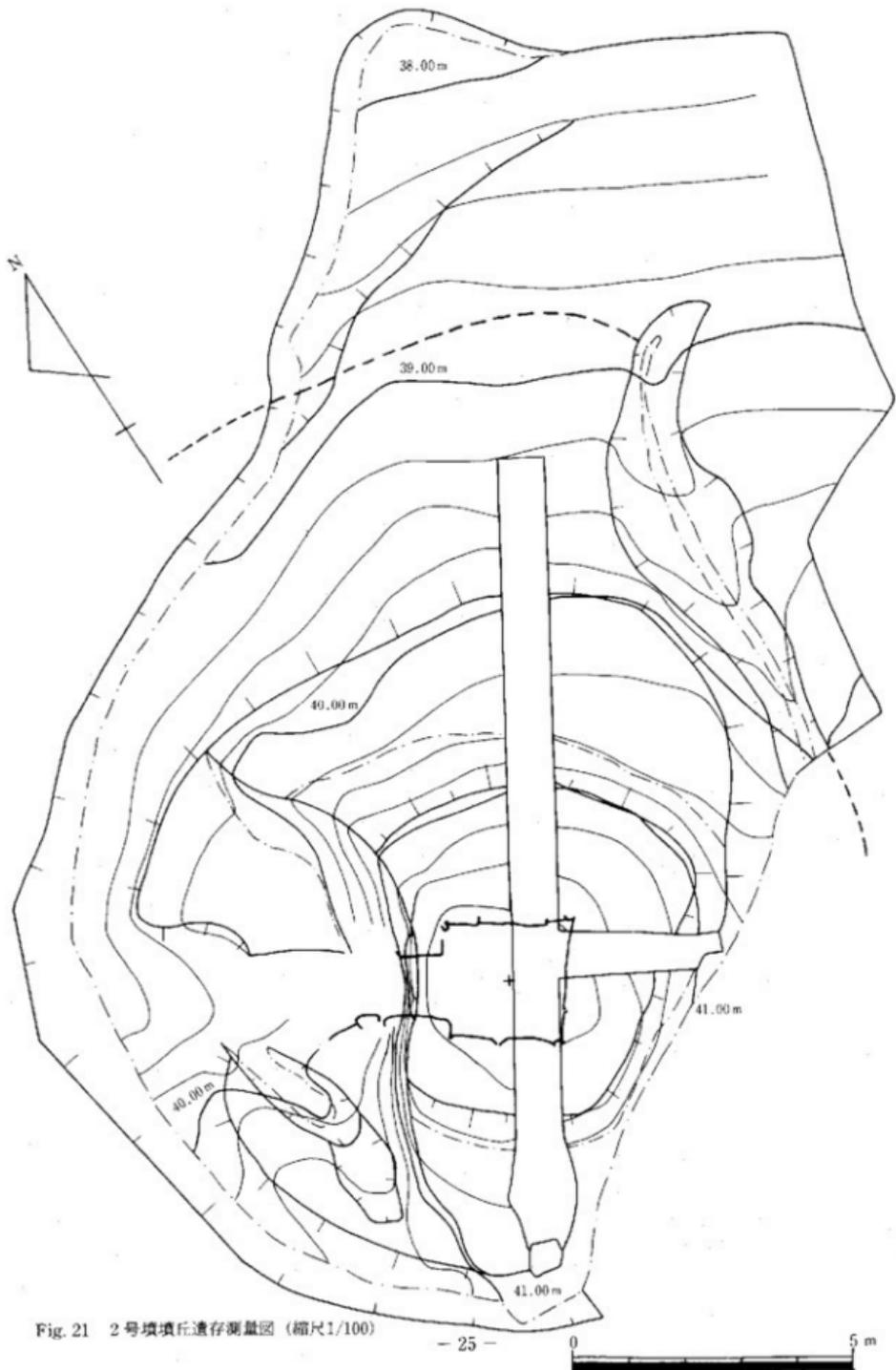


Fig. 21 2号墳填丘遺存測量圖 (縮尺1/100)

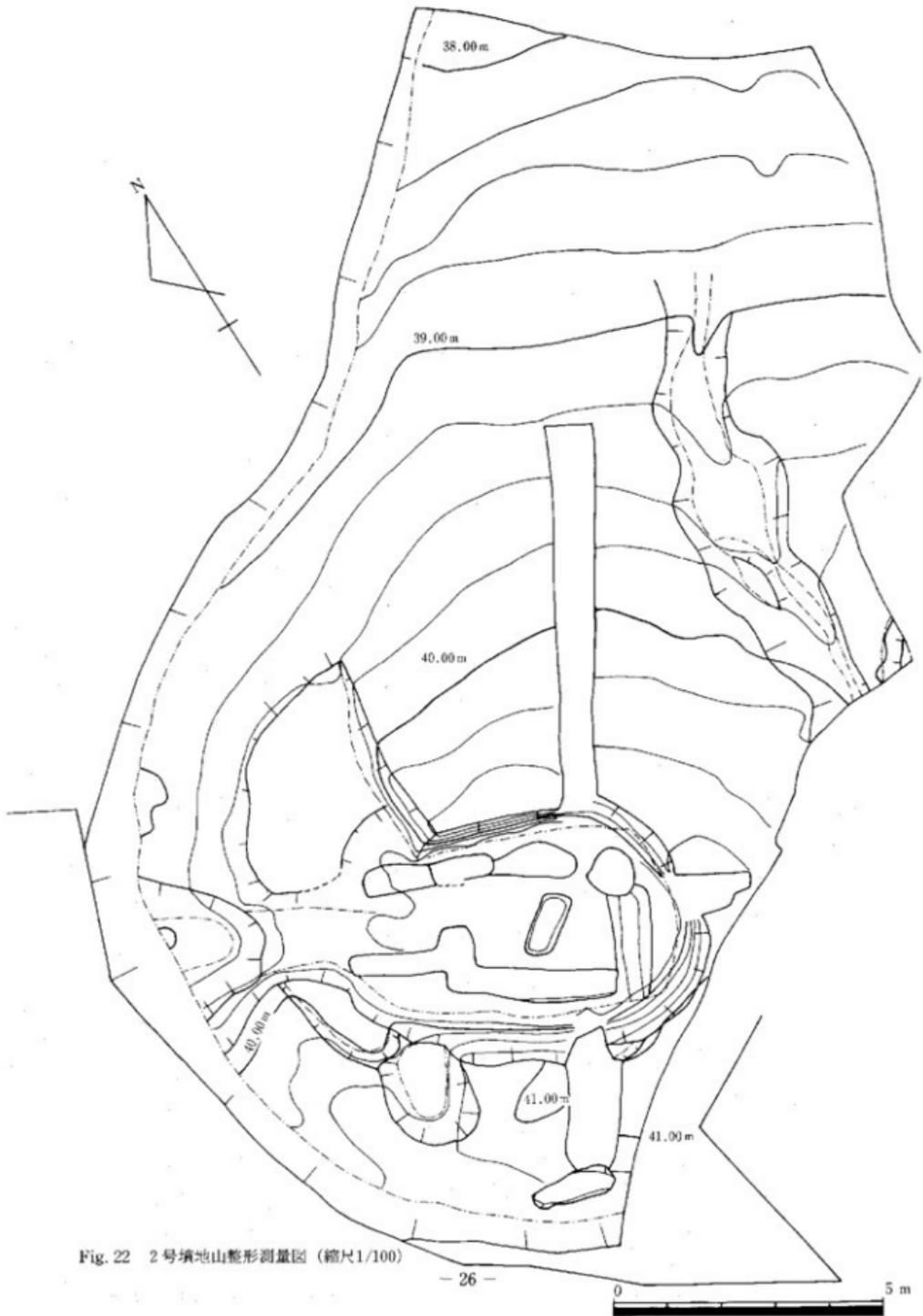


Fig. 22 2号墳地山地形測量図 (縮尺1/100)

b. 横穴式石室

2号墳の埋葬施設は主軸をN-60°-Wにとり、ほぼ北西に向かって開口する単式の両袖型横穴式石室である。羨道部左側の壁部は殆ど失われ、腰石の下に配する根石だけが残っている。右側は腰石2枚を残し殆ど失い、又天井部も全く残っていない。玄室内はすでに盗掘されており、副葬品等の土器類は現位置を保つ物は皆無で数石までも現存していなかった。攪乱された埋土を水洗いした結果、僅かではあるが鉄製品・土師器片等が残っていた。石室は掘方の内側に布掘りを行い、多少の歪みはあるがほぼ方形を呈する玄室を有し、すでに左側壁石及び天井石を欠いた羨道部・墓道へと連結する。現存する羨道部の端部に3個の石から成る第1根石を根石として閉塞施設がある。玄室と羨道部の対比はほぼ1:1の割合で構成されている。

石室掘方 (Fig.22・23 PL.23・24・25)

機械によって石材を撤去した後、石室掘方の全容を明らかにした。石室を収納する掘方は、地山整形面より掘り下げられ、奥壁幅は石室掘方上端で約4.7m、下端部で約3.2mを測る。残存長は石室掘方上端部から残存する羨道端部まで約6.8mを測り、下端部から残存する羨道部まで約6.4mを測る。羨道中央部まではU字形を呈するが、これより残存する羨道部にかけては約1mとすばまる。地山整形面からの深さは奥壁部・右壁部で2.5m、左壁部で2mを測る。地山整形面に沿って傾斜していくため羨道部では浅くなると考えられるが、水路建設時の破壊のためその高さは明らかでない。石室主軸線より左側は掘込みが鋭く腰石も掘方一杯に置かれているのに対し、石室主軸線より右側は掘込みが比較的緩やかで腰石も掘方壁面との間に若干の余裕をもって配置される。腰石配置部分は、幅0.6~0.7m、深さ0.15mの布掘りを行っている。

玄室中央部に長さ約1.3m、幅0.5mの土壇状掘方を検出したが、埋土中のブリキの空缶から後世の攪乱によるものと判断した。掘方底面は玄室壁面から第2根石までは平坦面を成すが、これより羨道部は約0.08m程高くなり羨道端部から墓道にかけ緩やかに下降していく。

玄室 (Fig.23 PL.27・28)

玄室は奥壁幅2.3m、左壁長2.3m、右壁長2.0m、玄門側壁幅2.0mを測り、平面形はやや歪んだ方形を呈する。奥壁腰石は右側がやや玄室内側にせり出し、右壁腰石も玄門側が内側にせり出している。左壁腰石は石室主軸線に平行に配置されており、壁線は3面とも直線をなす。石室構造は奥壁・左・右壁とも2枚の腰石からなり、これに左右サイズの異なる石材を立てて袖石としている。右側袖石は比較的大振りの石材を使用し1枚で天井石に達しているが、左側袖石は2枚の石材を積み上げ天井石に至る。玄室と羨道の境にある第2根石は長さ1.1m、幅0.25mの割石を両袖石の間に配し、これに接して玄室側に1段下げた状態で2石の石材を一列に並べ階段状の根石を作り出している。石室構築を個別に見ると奥壁はサイズの異なる2枚の石材を平らな面を内側にし、内側に傾斜をもって据え腰石としている。左側腰石は本古墳に使用され

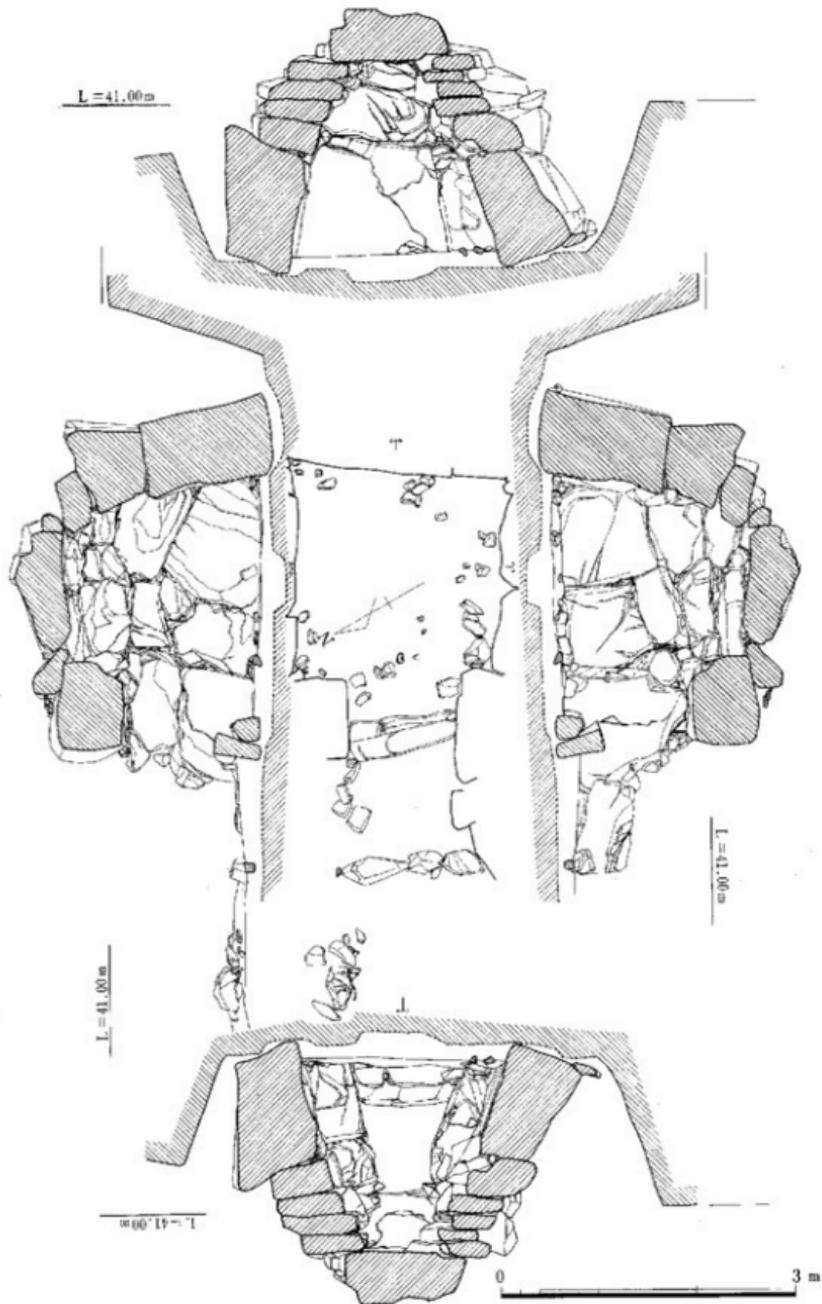


Fig. 23 2号填石室突湖园 (缩尺1/60)

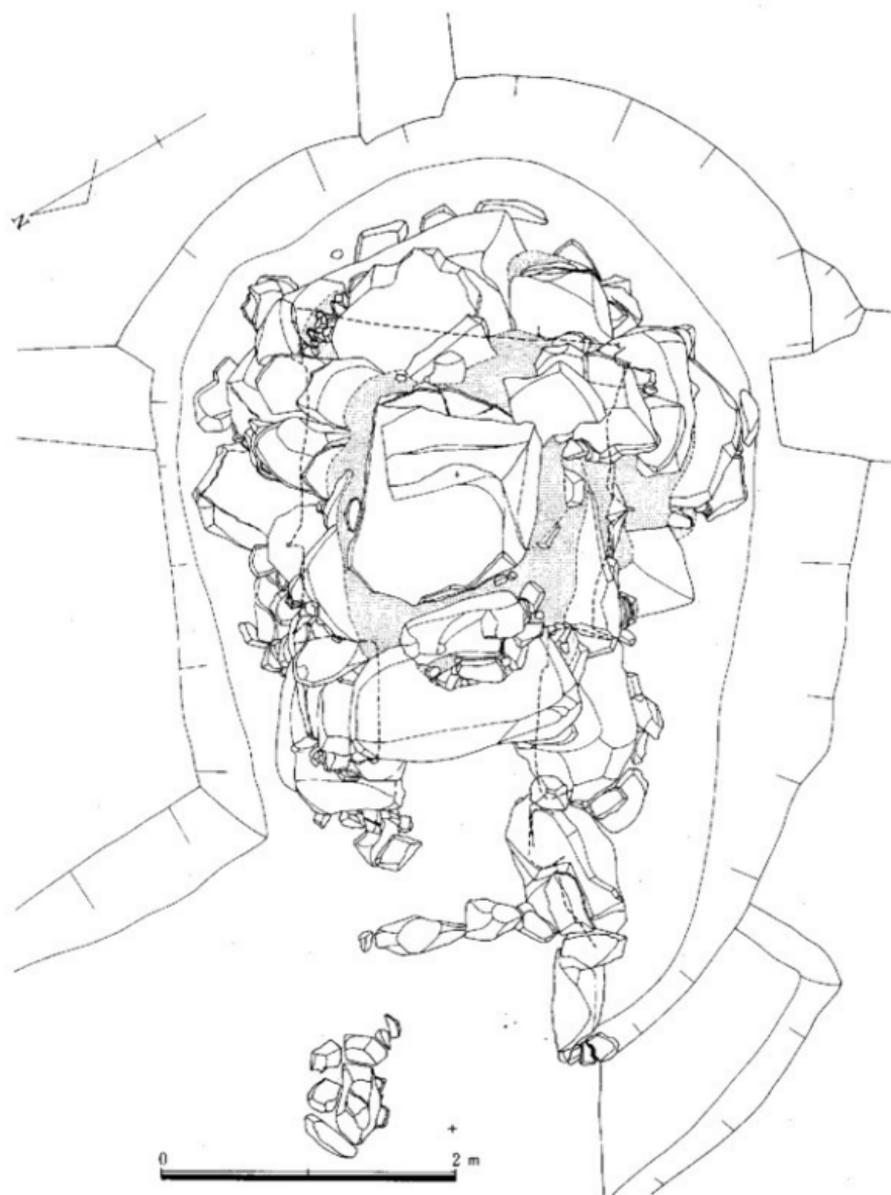


Fig. 24 2号墳石室俯瞰図 (縮尺1/40)

た石材の中で最も大きく幅1.7m、高さ1.3mを測り、右側腰石は幅0.5m、高さ1.1mを測る。比較的小振りの石材を目筋を通して更に1段積み上げ、隙間には小型の転石を埋込み空間を塞いでいる。3段目はこれより小振りの石を積み上げ天井部に至る。左壁腰石は最大幅1.2m、高さ1mの石材を奥壁側に配しそれに接して玄門側に幅0.6m、高さ0.9mの腰石を配す。2枚の腰石上部が平坦面をなしていないため間に小型の石を埋込んで上端を整えて更にその上に腰石より小振りの石材を2石配置し隙間には小石を埋込む。下段より上段に行くにしたがい石材も小振りになり面を整えながら内側にせり出した状態で積み上げられ、5段をもって天井部に至る。右壁腰石も左壁同様に傾斜をもち順次内側にせり出し積み上げ壁面は整えられず凹凸をなす。石材の積み方は奥壁・左右壁とも横・縦方向に目筋を通す重箱積みに近い。壁面は掘方底面より72度の傾斜をなす。石材は花崗岩を使用している。玄室と羨道部の対比は1:1である。

羨道 (Fig.25 PL.22・26)

水路建設時に大きな破壊を受け左側壁は残存していないが、第2榑石より約2.5mの所に腰石の根石として使用されたと思われる平石が残存することから羨道部はこの地点まで達していたと思われる。右壁も2石の腰石を残すのみであるが元来は、左壁とほぼ同じ壁長をもっていたと考えられる。羨道幅は玄門部で1.1mを測る。

墓道 (Fig.25 PL.21)

調査区域外のためその全容は確認し得ないが、残存長2.5m(玄室奥壁より約8.5m)を測る。平面形は石室主軸線より右側にゆるくカーブする。又、羨道部で0.5mあった幅も調査区域内端部では約1mと広がりを見せている。地山を削って造られた墓道は、羨道端部より緩やかに下降し、その深さは0.4mを測る。墓道内には黒色粘質土が多量に堆積しており、その中から土師器・須恵器の土器類や鉄滓が多量に出土した。2号墳出土遺物のほとんどがこの黒色粘質土からの出土である。墓道は左右の周溝へと広がりを見せる。周溝の調査は出来なかったが、恐らく馬蹄形を呈するものと考えられる。

閉塞施設 (Fig.25 PL.21・22)

現存する羨道部の端部より玄室側に形の異なる3個の円礫を一列に配した第1榑石を根石として閉塞施設が存在する。残存高は床面より0.5mを残すのみであるが、元来は人頭大の円礫を積み上げて天井石との間を密封していたものと思われる。閉塞施設の位置は、墓道側が石室奥壁より5m、玄室側が石室奥壁より4mでその間1mに配置されている。閉塞施設残存高は0.5mしかないが、これは水路・駐輪場建設工事に伴う破壊によるもので、第1榑石より玄室側に転落した閉塞石が本来第1榑石の上部に位置していたものと考えられる。第1榑石上には0.5m×0.4m大の切石状の石を玄室側に配し、入口付近には人頭大の円礫を数多く使用した痕跡を残している。

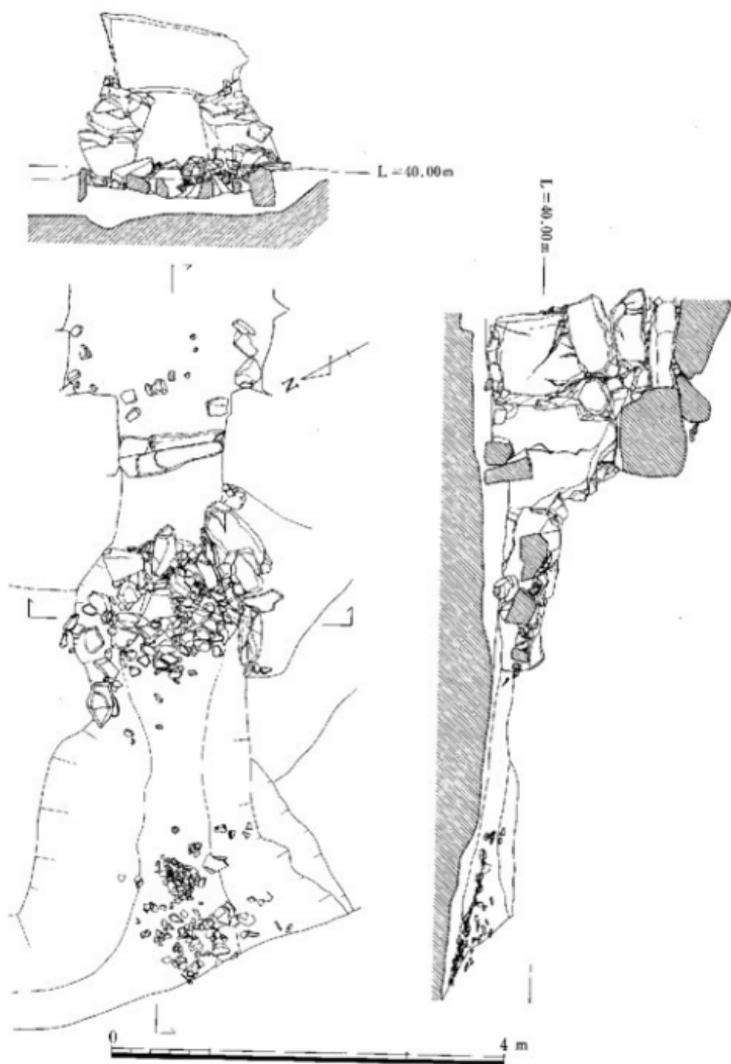


Fig. 25 2号填閉塞施設実測図 (縮尺1/60)

c. 出土遺物

2号墳の玄室は敷石までも破壊された状態で現位置を保つ物は皆無である。排土の水洗いによって僅かな鉄製品を採集しただけである。羨道部もブルドーザーによる破壊が著しく出土遺物は少量であった。最も遺物が出土したのは前庭部の墓道で2号墳の出土遺物の80%を占める。この他墳丘盛り土・地山から少量の遺物が出土したにとどまった。

須恵器 (Fig.26・27 PL.30・31)

環蓋 (02001・02002) 蓋は2点出土した。01は天井部と口縁部との境が1条の沈線で区切られる。天井部の外面の約1/2程ヘラ削りをし、口縁部の内外は回転ナデを施す。内面中心部はナデの後刷毛目を施す。ロクロ回転は右回り。器色は暗灰褐色を呈し、胎土は1mm前後の砂粒を含み、焼成は良好。口径12.6cm、器高3.6cmで天井部に×印のヘラ記号を記す。02は明確な天井部と口縁部の境を成す手法はない。天井部の外面に約1/3程ヘラ削りを施し、口縁部内外は回転ナデを施す。ロクロ回転は右回り。器色は内面が暗灰褐色、外面が灰色と黒灰色を呈し、胎土は精製された粘土を用いる。焼成は良好で、口径10.8cm、器高4.0cmを測る。天井部にW印のヘラ記号を記す。

環身 (02003) 環身としては03だけである。坏部が浅く、立ち上がりが内弯しながら口縁端部で立ち上がるが、その高さは0.8cmと低い。受部の端部は下がりぎみで立ち上がりとの接点で段をなす。器色は暗灰褐色を呈し、胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好。ロクロ回転は右回りで口径13.0cmを測る。

台付坏身脚部 (02004) 高杯の脚部とも廻の口縁部とも考えられるが、ここでは台付坏身脚部としておく。ロクロ回転は右回りでナデ仕上げである。底径は16.6cmで、器色は灰褐色を呈し細砂を多量に含む。焼成は良好。

碗 (02005) 口径13.4cm、残存高6.3cm、推定高8.0cmである。台付か否かは不明。肉厚は0.4cm程で胴部からやや外反しながらほぼ垂直に立ち上がる。内外ともナデ仕上げで、ロクロ回転は右回り。器色は内外とも青灰褐色で、胎土は細砂及び1～2mm大の砂粒を含む。焼成は良好。

短頸壺 (02006) 口縁部と底部が欠損しているが、胴部最大径が14.2cmでかなり胴部が張る。胴部下位から中位にかけてカキ目を施す。口縁部は短く立ち上がる。器色は青灰褐色を呈し、胎土は良質の粘土を使用している。焼成は堅緻である。

高坏 (02007) 杯身だけで脚部を欠損している。器面外面の約1/2程ヘラ削りを実施した後、ナデで消している。立ち上がりは内弯するが、口縁端部を僅かに摘み上げている。口径12.8cm、立ち上がり1.1cmを測る。ロクロ回転は左回りで、器色は灰褐色を呈し、胎土は1mm大の石英・長石粒を多く含み、焼成は良好である。

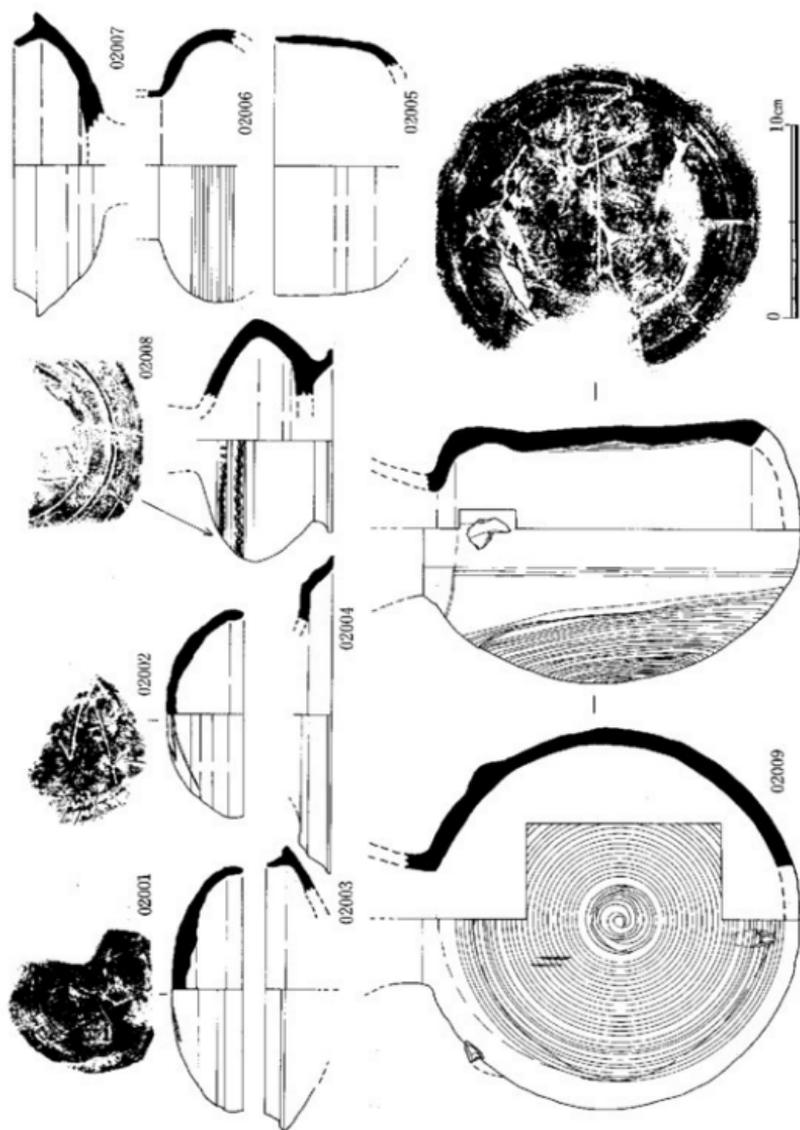


Fig. 26 2号墳出土遺物実測図(1) (縮尺1/3)

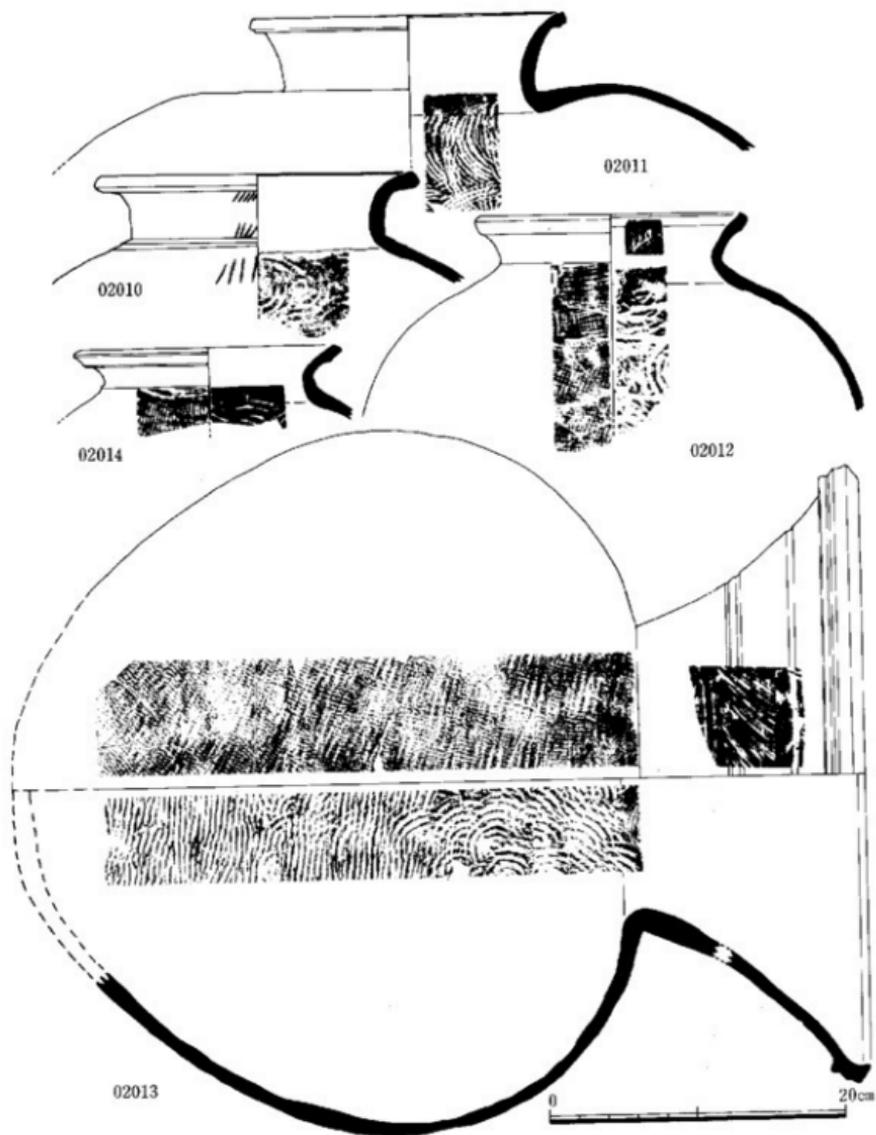


Fig. 27 2号填出土遗物实图(2) (缩尺1/4)

台付壺 (02008) 口縁部と底部の一部が欠損している。内面の最大胴部を境として下位がヘラ削り、上位がナデ仕上げ。外面はナデの後、3条の沈線を巡らしその間に櫛描き波状文を2段に配する。ロクロ回転は左回りで最大胴部径12.6cm、底径9.6cm、残存高6.9cmを測る。器色は暗灰褐色を呈し、胎土は細砂及び1mm前後の石英粒を少量含む。焼成は非常に堅緻である。

提瓶 (02009) 口縁部を欠損している。体部の前面の張りは大きくこれに対して後面は膨らまない。前面に柱目板によるカキ目を施し、後面はヘラ削りの後回転ナデを加える。底部は丸底で体部の両肩に扁平な飾り把手がつく。前面下部に貼り付いている粘土の塊は左側把手の一部であり焼成時に割落付着したものである。後面に二重の+印のヘラ記号を記す。器色は灰褐色を呈し、焼成は良好、胎土は細砂を含む。残存高21.1cm、前面幅9.8cm、側面幅13.7cmを測る。

甕形土器 (02010~02014) いずれも基道内黒色粘質土からの出土である。10は頸部が垂直に立ち上がり口縁部で大きく外反する。口唇部は丸くおさめ内側で1条の沈線を巡らす。内面は同心円文の叩きの後ナデ調整。外面は平行叩きの後横ナデを加える。復原口径22cm、残存高7.7cmを測る。11は肩の張りが大きく口縁部はやや外反しながらほぼ直立し口唇部でさらに強く外反する。口唇部で把厚し内外面とも1条の凹線を巡らす。体部内面は同心円文の叩きを数回重ねている。外面は肩部で縦・横の二方向の平行叩きを施すが、胴部中位では横方向のみの平行叩きを施した後ナデを加える。口径21cm、残存高9.5cm、胴部径46.8cmを測る。12は肩の張らない中型の甕で口縁部は緩やかに外反し端部を丸く納める。口縁内面にヘラ記号を記す。体部内面は同心円文の叩き、外面は重複した格子叩きの後ナデ調整を行なう。口径18.5cm、残存高14.5cmを測る。13は口径42.8cmの中型甕で朝顔状に大きく開く口縁部をもつ。頸部中位に二条、上部に一条の沈線を巡らし、その間に左下から右上に向けて斜行文をヘラで施す。口縁部は把厚し一条の凹線を巡らす。胴部は球形を呈し、外面は格子叩き施行後カキ目調整を行なう。内面は同心円文の叩きを施す。胴部最大幅48.8cm、残存高56.4cmを測る。14の口縁部は大きく外反し端部で把厚し玉縁状となる。内面は同心円文、外面は縦・横方向の平行叩きの後ナデ調整を加える。口径18.2cmを測る。器色は10が青灰色、11が暗褐色、12、14が灰褐色、13が黒褐色を呈し、焼成は12以外は良好である。胎土はほとんどが3~5mmの細砂粒を含む。

土師器 (02020~02034)

坏身 (20) 丸味をもちながら立ち上がる体部は口縁部で垂直に立ち口唇部で尖り気味に丸く納める。内外面とも回転ナデを施す。底部ヘラ削りの範囲は1/2程で、ロクロ回転は右回りである。口径11.2cm、器高4.2cmを測り、焼成は普通、器色は淡茶褐色で外面の一部に黒斑が認められる。胎土は細砂及び雲母が混入している。

盤 (21) 底部より緩やかに立ち上がり口縁部で丸く納める。ヘラ削りの後ナデ調整を施す。器色は赤褐色（一部に丹塗りの痕跡）を呈し、焼成はやや悪い。口径9.8cm、器高3.3cmを測る。胎土は細砂及び雲母混入。

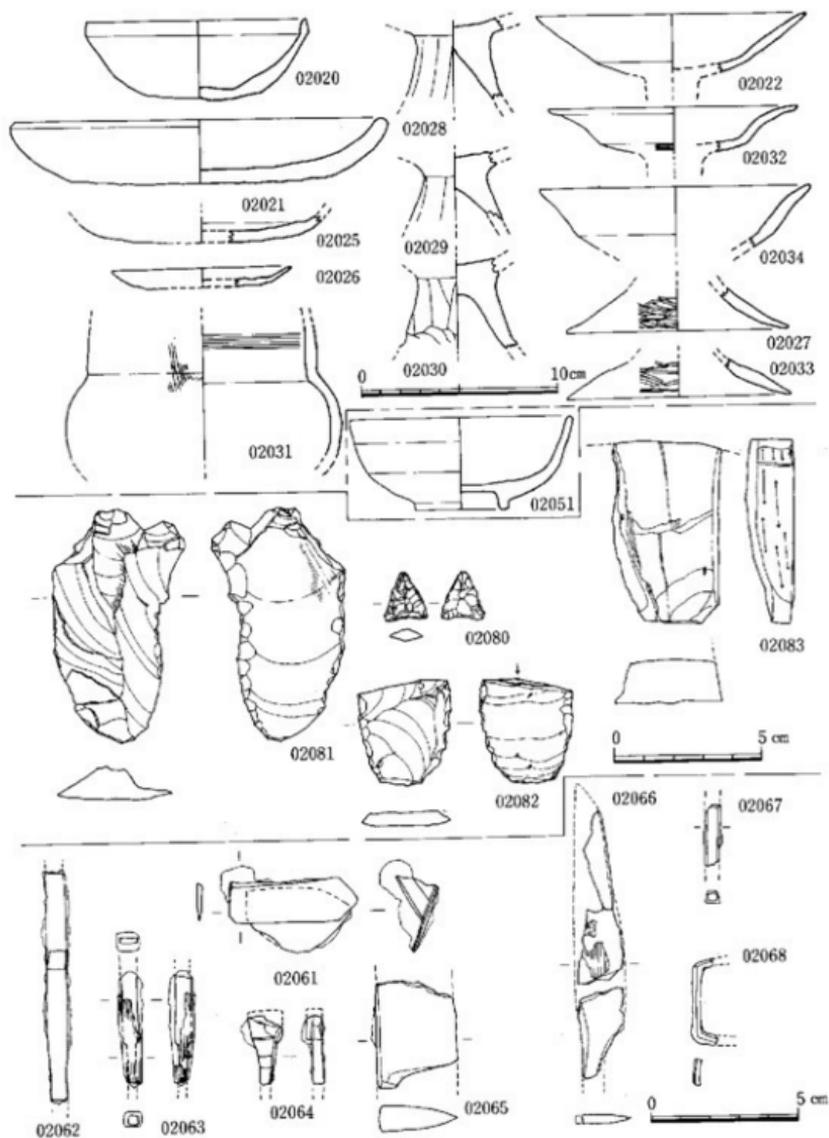


Fig. 28 2号墳出土遺物実測図(3) (縮尺1/2、1/3)

皿 (25、26) 25が静止時26が回転時のヘラ切り離しによる。共に回転ナデによる調整を施す。26の口径は9.2cm。器色は両方とも淡褐色を呈し、焼成は良好。胎土は細砂、雲母を含む。

小型丸底壺 (31) 口縁端部及び底部を欠損している。胴部より垂直に立ち上がる頸部の内側は1mm幅の櫛目を施し、胴部内面はナデ調整を施す。胴部外面はヘラ削り、頸部で刷毛目施行後ナデを施す。器色は暗赤褐色、焼成は良好、残存高7cm、胴部最大幅14cmを測る。

高杯 (22、27-30、32-34) 杯部は下位で弱い段をもち直線的に開口する22と、下位段より大きく外反する32、比較的深い杯部で弱い段を持つ34の3点がある。32の外面は、段より下部をヘラによる研磨を施し、上部はナデ調整後ヘラ研磨(暗文)を施す。他は全てナデ調整である。口径は22、34が13.8cm、32が12.8cmを測る。27-30、33の脚部の内28-30は内外面はヘラ削りを施し、内面のみにナデ調整を加える。脚根部は2点で、33は丸味をもちながら外開する。ともに縦のヘラ削りを施す。底径は、27が11.4cm、33が10.4cmを測る。器色は28、32、34が明赤褐色、22が赤茶褐色、27、29、30、33が暗赤褐色を呈する。

磁器碗 (02051) 表土から出土したもので本古墳とは直接の関係は認められない。全面に褐釉が認められるが内面に重ね焼きの痕跡が有る。口径11.4cm、器高4.8cm、底径4.8cmを測る。

石器 (02080-02083)

石鎌 (80) 小型の三角鎌で先端部が僅かに欠けている。刃部は三方向から押し剥離によって造り出しているが、一部に第1次剥離面が僅かに残る。黒鉄石製である。掻器 (81) 両側辺部に細かな剥離を施している。横型の石匙とも考えられるがつまみ部分の剥離が認められないことから縦長剥片を利用した掻器とした。サヌカイト製である。折断剥片 (82) 側辺部に細かな剥離を加えている。剥片の頭部付近の中心部から折断している。風化は進んでいる。サヌカイト製である。磁石 (83) 正面・裏面は剥離されているため全形は不明である。このため磁石面としては、一面しか観察できない。茨道部からの出土で輝緑凝灰岩製である。

鉄製品 (02061-02068)

玄室内は敷石までも剥ぎ取られ、ひどい攪乱を受けていたため玄室内の土を水洗した。その結果10点前後の鉄製品を選別できた。

鉄鎌 (62、63、67) 基部の部分だけであるが、63には木片が付着している。断面はほとんど四辺形を呈するが、63の上部断面が扁平な四辺形を呈する。

釘 (64) 鎌とも思われたが、上端が折れ曲げてある所から釘とした。断面四辺形を呈する。

直刀 (65) 1点だけ破片が出土した。残存状態は非常に良い。残存長3.7cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmを測る。

刀子 (66) 3点の部品から成る。一部に木片が付着している。先端部と基部の部分が欠損しているが、復原長11.3cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmである。

その他の鉄製品 (61、68) 61は2枚の板状鉄板が付着したものと考えられる。両方とも端

部を欠損しているため、全容は不明である。上端に付着するものは残存長4.4cm、幅1.5cm、厚さ0.25cmを測る。68は両端が欠損するがおそらく四辺形かU字状となる装飾具と考えられる。

広石南古墳B群2号墳遺物一覧表 (H1M-2)

遺物番号	出土地点	器 種	備 考	遺物番号	出土地点	器 種	備 考
880902001	羨道部	須恵・杯蓋	窯印×有り	880902036	墳丘内	土師・甕他67点	実測不可
02002	前庭部	須恵・杯蓋	窯印W有り	02037	欠番		
02003	前庭部	須恵・杯身	口縁のみ	02038	墳丘内	土師・皿他12点	実測不可
02004	前庭部	須恵・台付杯脚部		02039	墳丘内	土師・細片	実測不可
02005	前庭部	須恵・碗		02040	前庭部	土師・細片	実測不可
02006	前庭部	須恵・短頸壺		02041	欠番		
02007	前庭部	須恵・無蓋高杯		}	}		
02008	前庭部	須恵・台付壺	胴部に波状文	02050	欠番		
02009	前庭部	須恵・提瓶	+の窯印	02051	墳丘内	磁器・甕	
02010	前庭部	須恵・壘形土器	接合不可25点	02052	墳丘内	磁器・注口	実測不可
02011	前庭部	須恵・壘形土器	接合不可27点	02053	欠番		
02012	前庭部	須恵・壘形土器	ヘラ記号有り	}	}		
02013	前庭部	須恵・壘形土器	接合不可18点	02060	欠番		
02014	前庭部	須恵・壘形土器	接合不可16点	02061	玄室埋土	銚金具?	
02015	前庭部	須恵・短頸壺	実測不可2点	02062	玄室埋土	鉄鍍片	
02016	前庭部	須恵・壘形土器	実測不可13点	02063	玄室埋土	鉄鍍片	木片付着
02017	前庭部	須恵・壘形多様	実測不可18点	02064	玄室埋土	釘or鉄鍍	
02018	欠番			02065	玄室埋土	蓋刀の破片	
02019	欠番			02066	玄室埋土	刀子	
02020	羨道部	土師・杯身		02067	玄室埋土	鉄鍍片	
02021	前庭部	土師・甕	赤色顔料(丹)	02068	玄室埋土	銚金具	
02022	前庭部	土師・高杯		02069	欠番		
02023	周溝	土師・碗	実測不可	}	}		
02024	羨道部	土師・碗	実測不可	02071	欠番		
02025	玄室	土師・皿		02072	前庭部	鉄淨15点	実測不可
02026	前庭部	土師・小皿		02073	墳丘内	鉄淨2点	実測不可
02027	羨道部	土師・高杯脚部		02074	羨道部	鉄淨2点	
02028	前庭部	土師・高杯脚部		02075	欠番		
02029	前庭部	土師・高杯脚部		}	}		
02030	前庭部	土師・高杯脚部		02079	欠番		
02031	前庭部	土師・小型丸底壺		02080	墳丘地山	石鏃	黒耀石
02032	前庭部	土師・高杯口縁部		02081	墳丘地山	搔器	讃岐石
02033	前庭部	土師・高杯脚部		02082	墳丘地山	縦長刺片	讃岐石
02034	前庭部	土師・高杯口縁部		02083	羨道部	磁石	輝緑凝灰岩
02035	前庭部	土師・高杯他8点	実測不可	02084	墳丘地山	刺片15点実測不可	黒耀石

Tab. 2 2号墳出土陶器遺物一覧表

第4章 ま と め

今回の調査は、今宿平野と早良平野とを分かつ丘陵に所在する二基の古墳（広石南古墳群B群）の調査であった。本章ではこれまでに述べたことをいくつかの項目ごとに簡単にまとめることにする。

造営年代 1号墳は、出土遺物が6世紀後半に比定されることから、同時期ごろに造営されたと想定される。さらに遺物を詳細に検討すると、6世紀の第3四半世期を上限、6世紀末を下限とする範囲において、築造および少なくとも一回の追葬が行われたことを知り得る。7世紀には葬送の場として供されていない。2号墳は、築造時期が1号墳よりやや新しくなるものの、6世紀第3四半世期中に初回の葬送が行われている。追葬については、6世紀末までに少なくとも一回の追葬が行われてはいるものの、7世紀には行われた形跡は認められない。

本墳に限れば、1・2号墳の造営期間は、初回の被葬者と以降の被葬者——家長と次家長を除いた家長の子女——との関係に基づく葬送の時間差に合致する。

築造方法 1・2号墳においては、築造規模に若干の差異が認められるものの、築造方法や手順を同じくする。ここでは1号墳主体部の築造手順を復元してみる。1) 墓壇を掘削・整地した後には腰石を据える。裏込めには粘質土と砂質土を互層にし、丁重に突き固める。同時に石室内も埋め固めて、腰石の到壊を防ぐ措置をとる。2) 羨道部では二段積み上げ、玄室部でもこれとほぼ同じ高さにまで壁石を積み上げる。裏込め、石室内は腰石時と同じくする。したがって、羨道部においては、最上段の壁石の上面以外は埋まっている状態。3) 玄門の天井石から羨道部天井石を据付る。玄室奥壁は一段、左右壁は二段積み上げ、玄門の天井石の上面と高さを揃える。4) 玄室の壁石を一段積み上げ、裏込め等を行った後に天井石を据付る。5) 天井石と壁石の隙間を粘土で充填し、墳丘を成形すると共に、石室内埋土の除去を行う。

群集墳 周辺の古墳群の大半は、丘陵斜面に立地しているものの墳丘は欠失しているため、表土を除去した段階でしか古墳の存在を確認出来ない場合が多い。したがって、広石南古墳群は二基の小円墳から構成されているが、調査前に墓道を含む谷部が大規模に埋められており、先に述べた周辺古墳の位置から考えると、本古墳群は二基以上の古墳から成っていた可能性が高い。

今回の調査では、造営主体者の断定を始め追葬の回数など古墳の全容を明らかにすることは出来なかった。今後、周辺地域における類例の出現を待って再検討したい。

参 考 文 献

- 福岡県教育委員会 「今宿バイパス開年埋蔵文化財調査報告書第1集。 1970年
- 福岡市教育委員会 「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年
- 小野山 節 編 「古代史発掘 6」講談社 1975年
- 鯉山 登・田村園造編 「古代の日本 3 九州」角川書店 1975年
- 竹内理三 「荘園分布図」吉川弘文館 1976年
- 国史大系編修会 「延喜式後編」『国史大系』吉川弘文館 1979年
- 田辺昭三 「須磨藤大成」角川書店 1981年
- 小田富士雄 「九州考古学研究」学生社 1988年

広石南古墳群周辺主要調査遺跡報告書

- 福岡市教育委員会 「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 1977年
- 福岡市教育委員会 「福岡市野方中原遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集 1974年
- 福岡市教育委員会 「野方中原遺跡の遺物(Ⅱ-A 溝出土の土器)」福岡市立歴史資料館研究報告書第2集 1978年
- 福岡市教育委員会 「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集 1986年
- 福岡市教育委員会 「羽根戸遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集 1988年
- 福岡市教育委員会 「牟多田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集 1974年
- 福岡県労働者住宅生活協同組合 「宮の前遺跡A-D地点」 1971年
- 福岡市教育委員会 「宮の前遺跡F地点」福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集 1971年
- 福岡市教育委員会 「下山門遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 1973年
- 福岡市教育委員会 「下山門の女田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第170集 1987年
- 筑紫市教育委員会 「金武古墳群発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集 1971年
- 福岡市教育委員会 「福岡山影塚1号墳発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集 1971年
- 福岡市教育委員会 「草場古墳・斜ヶ洞瓦窯跡」 1974年
- 福岡市教育委員会 「徳永アタタ古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集 1980年
- 福岡市教育委員会 「重要遺跡確認調査報告書1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集 1981年
- 福岡市教育委員会 「福岡古墳 1981～83年度概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第112集 1984年
- 福岡市教育委員会 「重留C群第1号墳」福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集 1983年
- 福岡市教育委員会 「重留遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集 1988年
- 福岡市教育委員会 「有田七田前遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集 1983年
- 福岡市教育委員会 「有田周辺遺跡調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集 1977年
- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第1集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集 1980年

- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第2集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集 1982年
- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第3集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集 1982年
- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第4集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集 1983年
- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第5集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集 1984年
- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第6集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集 1985年
- 福岡市教育委員会 「有田遠跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集 1986年
- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第7集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 1986年
- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第8集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集 1987年
- 福岡市教育委員会 「有田・小田部第9集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集 1988年
- 福岡市教育委員会 「鶴町遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 1976年
- 福岡市教育委員会 「原深町遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集 1981年
- 福岡市教育委員会 「高柳遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 1981年
- 福岡市教育委員会 「福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告書」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集 1981年
- 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集 1982年
- 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 1984年
- 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅲ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 1987年
- 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅳ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集 1987年
- 福岡市教育委員会 「田村遺跡Ⅴ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 1988年
- 福岡市教育委員会 「拾六町ツジ遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 1983年
- 福岡市教育委員会 「次郎丸薬石遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 1981年
- 福岡市教育委員会 「飯塚神社関係史料集」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第78集 1981年
- 福岡市教育委員会 「西區岡辺遺跡調査報告書(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 1977年
- 福岡市教育委員会 「西區岡辺遺跡調査報告書(2)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集 1978年
- 福岡市教育委員会 「西區岡辺遺跡調査報告書(3)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集 1980年
- 福岡市教育委員会 「西區岡辺遺跡調査報告書(4)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 1981年
- 福岡市教育委員会 「西區岡辺遺跡調査報告書(5)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集 1983年
- 福岡市教育委員会 「西區遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集 1987年
- 福岡市教育委員会 「吉武塚原古墳群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集 1980年
- 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集 1986年
- 福岡市教育委員会 「吉武高木 一弥生時代埋葬遺跡の調査概要」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集 1986年
- 福岡市教育委員会 「吉武遺跡群」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集 1988年
- 福岡市教育委員会 「今山遺跡(1)」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集 1973年
- 福岡市教育委員会 「今山・今宿遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集 1981年

- 福岡市教育委員会 「今宿五郎江遺跡Ⅰ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集 1986年
- 福岡市教育委員会 「丸瀬山古墳」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第10集 1970年
- 福岡市教育委員会 「丸瀬山古墳Ⅱ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第142集 1986年
- 福岡市教育委員会 「福岡市高遠鉄道関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）－西新町遺跡－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集 1982年
- 福岡市教育委員会 「福岡市高遠鉄道関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）－藤崎遺跡－」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集 1981年
- 福岡市教育委員会 「藤崎遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 1982年
- 福岡市教育委員会 「藤崎遺跡Ⅲ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集 1986年
- 福岡市教育委員会 「藤崎遺跡Ⅳ」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第138集 1986年
- 福岡市教育委員会 「筑道大野二丈線関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集 1980年
- 福岡市教育委員会 「福岡市文化財分布地図」 1979年
- 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集」 1970年
- 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集」 1973年
- 福岡県教育委員会 「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集」 1976年

PLATES

圖 版



(1) 調査地周辺航空写真

〔この空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院長行の1万分の1空中写真を複製したものである。(承認番号) 第963九規、第397号〕



(1) 調査地航空写真(1987年撮影)

「この空中写真は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1万分の1空中写真を複製したものである。(承認番号) 昭83九国、第39号」



(1) 1号墳 調査前遠景 (南から)



(2) 1号墳 調査前近景 (南から)



(1) 1号墳 墳丘遺存状況(南から)



(2) 1号墳 墳丘遺存状況(東から)



(1) 1号墳 羨道部閉塞状況(南から)



(2) 1号墳 羨道部閉塞状況(北から)



(1) 1号墳 周溝堆積状況 (南から)



(2) 1号墳 周溝 (南から)



(1) 1号墳 列石出土状況 (西から)



(2) 1号墳 墳丘遺物出土状況 (南から)



(1) 1号墳 墳丘版築状況(南から)



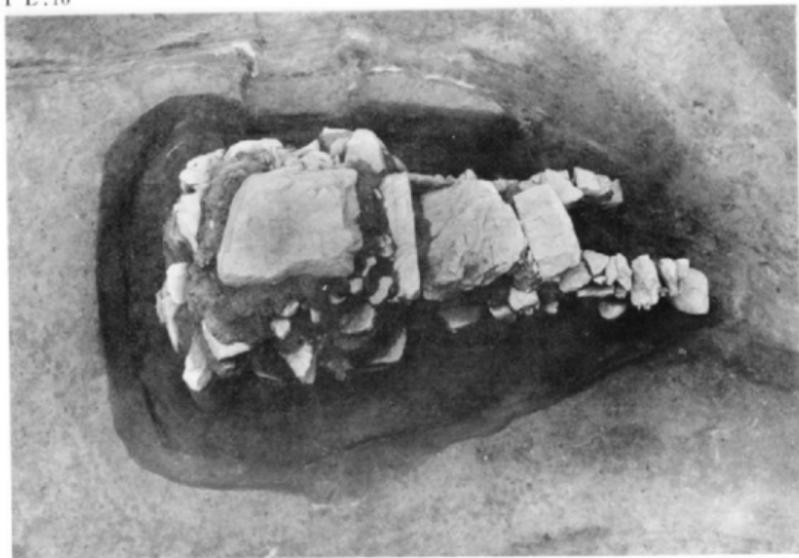
(2) 1号墳 墳丘版築状況(東から)



(1) 1号墳 地山整形と石室（南から）



(2) 1号墳 掘り方と石室（南から）



(1) 1号墳 廻り方と石室 (西から)



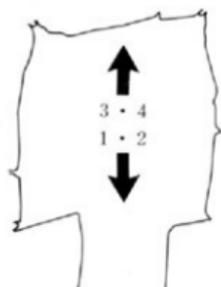
(2) 1号墳 廻り方と石室 (北から)



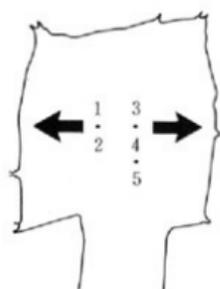
(1) 1号墳 石積み状況 (東から)



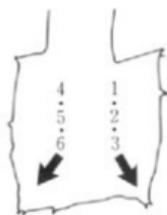
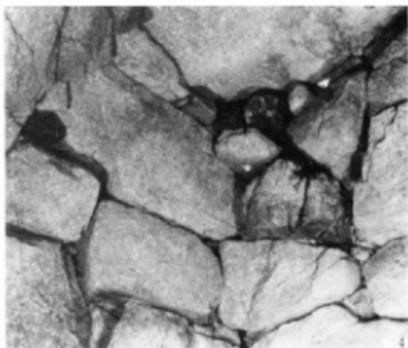
(2) 1号墳 石積み状況 (西から)



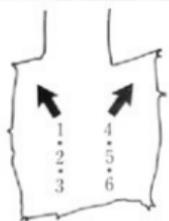
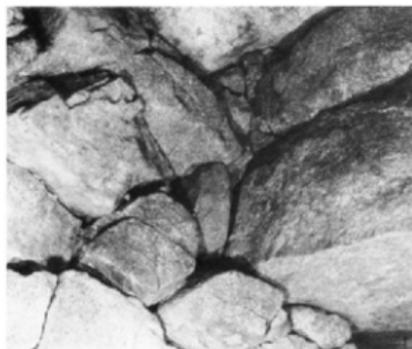
- | | |
|---------|---------|
| 1、玄門上段部 | 3、奥壁上段部 |
| 2、玄門下段部 | 4、奥壁下段部 |



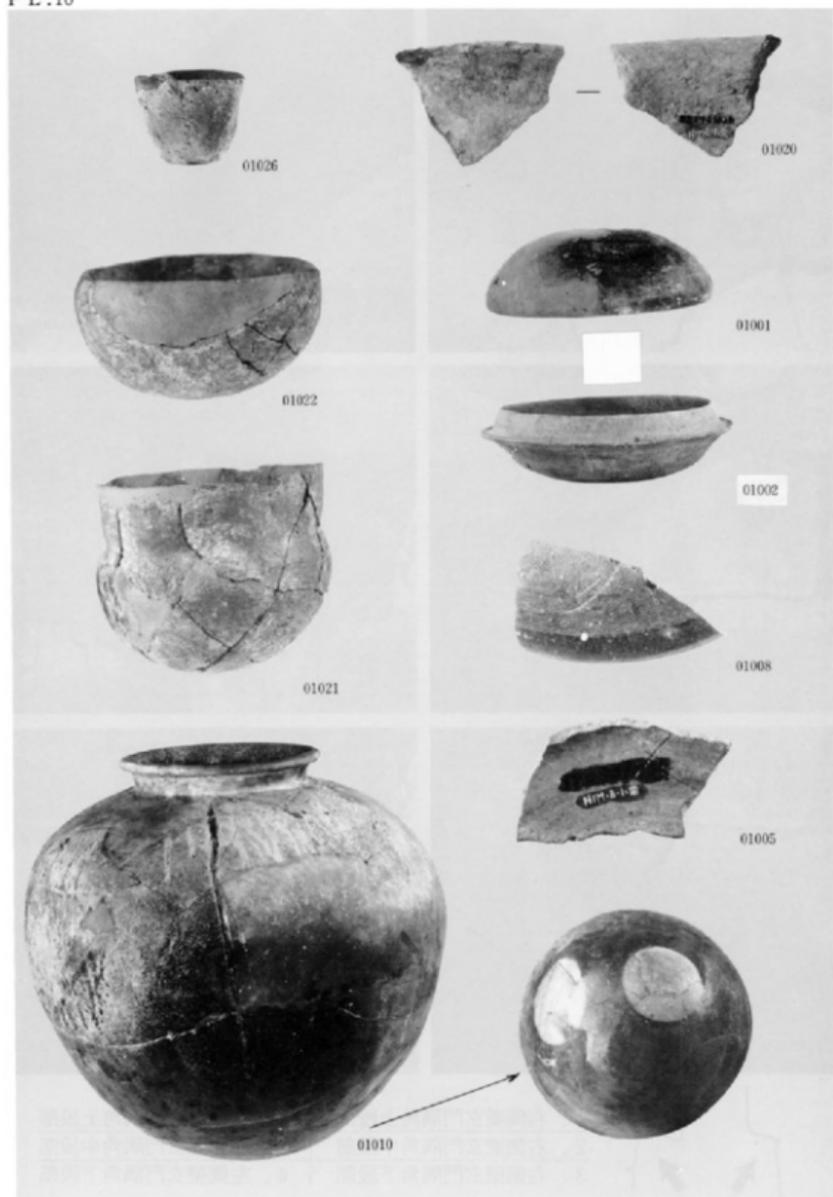
- | | |
|----------|----------|
| 1、左側壁上段部 | 3、右側壁上段部 |
| 2、左側壁中段部 | 4、右側壁中段部 |
| | 5、右側壁下段部 |



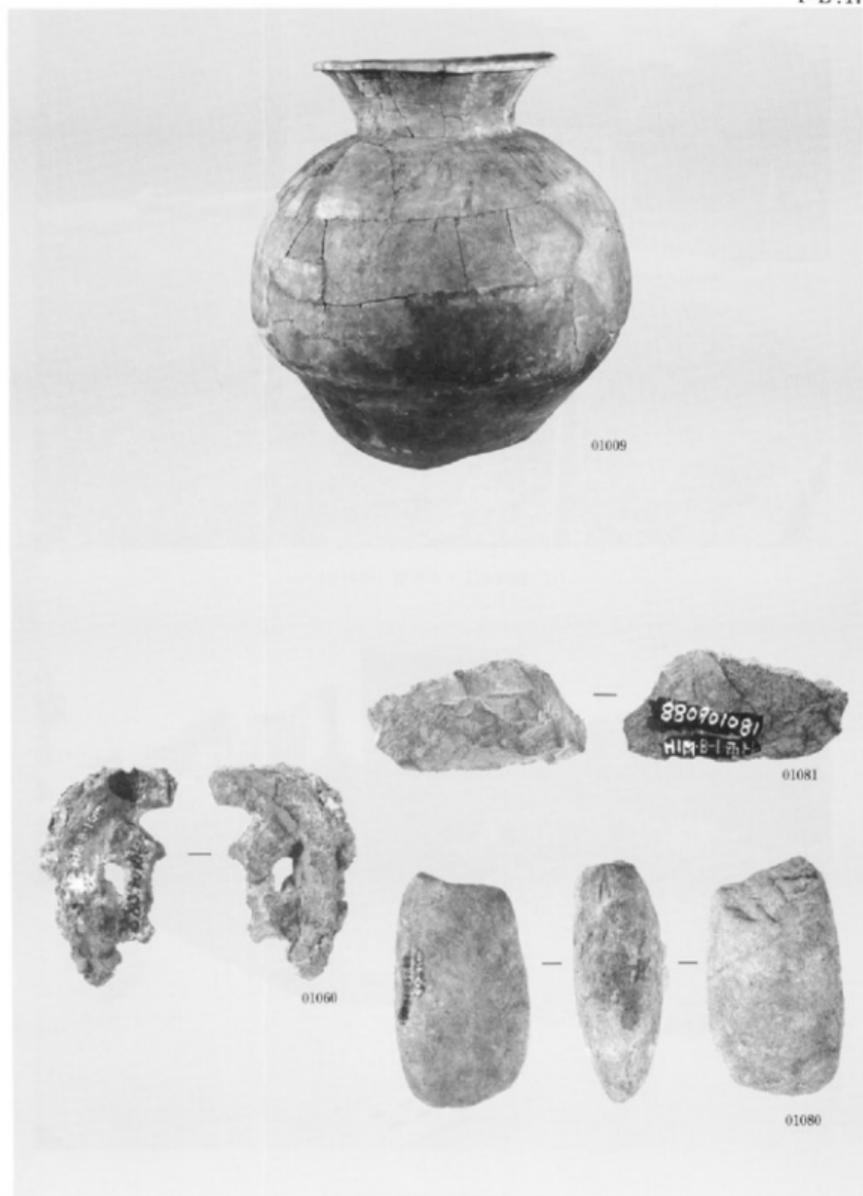
- | | |
|--------------|--------------|
| 1、左側壁奧壁隅角上段部 | 4、右側壁奧壁隅角上段部 |
| 2、左側壁奧壁隅角中段部 | 5、右側壁奧壁隅角中段部 |
| 3、左側壁奧壁隅角下段部 | 6、右側壁奧壁隅角下段部 |



- | | |
|--------------|--------------|
| 1、右側壁玄門隅角上段部 | 4、左側壁玄門隅角上段部 |
| 2、右側壁玄門隅角中段部 | 5、左側壁玄門隅角中段部 |
| 3、右側壁玄門隅角下段部 | 6、左側壁玄門隅角下段部 |



(1) 1号墳出土遺物-1



(1) 1号墳出土遺物-2



(1) 調査前1・2号墳（南から）



(2) 2号墳現況近景（西から）



(1) 墳丘遺存状態（北から）



(2) 墳丘遺存状態（前庭部まで）（西から）



(1) 閉塞施設検出状態（西から）



(2) 閉塞施設検出状態（墳丘から）



(1) 閉塞施設と前庭部（東から）



(2) 前庭部土器出土状態（西から）



(1) 墳丘遺存状態とトレンチ (南から)



(2) 閉塞施設排除後の羨道部 (西から)



(1) 石室俯瞰と土層状態 (東から)



(2) 掘り方と土層 (東から)



(1) 右側土層の掘り方 (南から)



(2) 石室階と掘り方 (東から)



(1) 地山整形と石室側面（南から）



(2) 地山整形と石室（北から）



(1) 石室遺存状態 (西から)



(2) 羨道部検出状態 (北から)



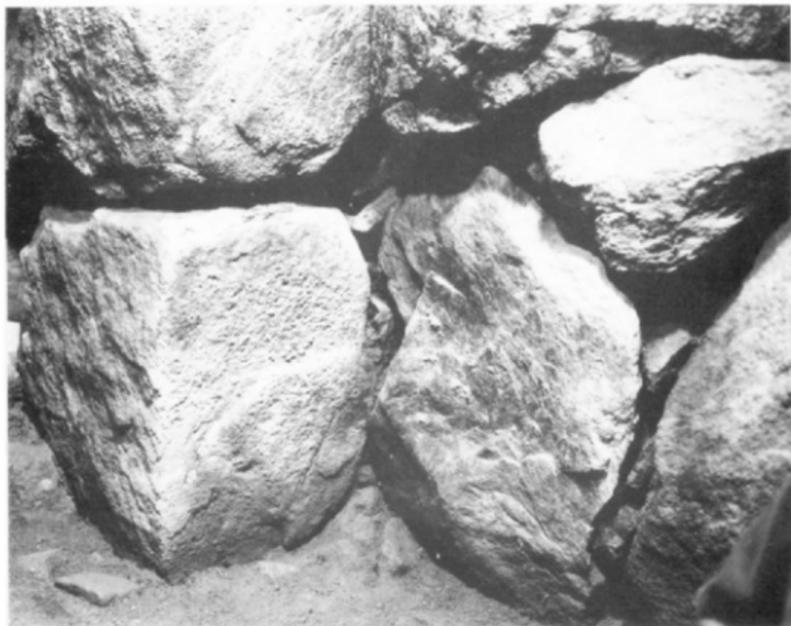
(1) 棚石と袖石検出状態 (玄室から羨道部を望む)



(2) 玄室奥壁 (羨道部から玄室を望む)



(1) 右側袖石部分（玄室より）



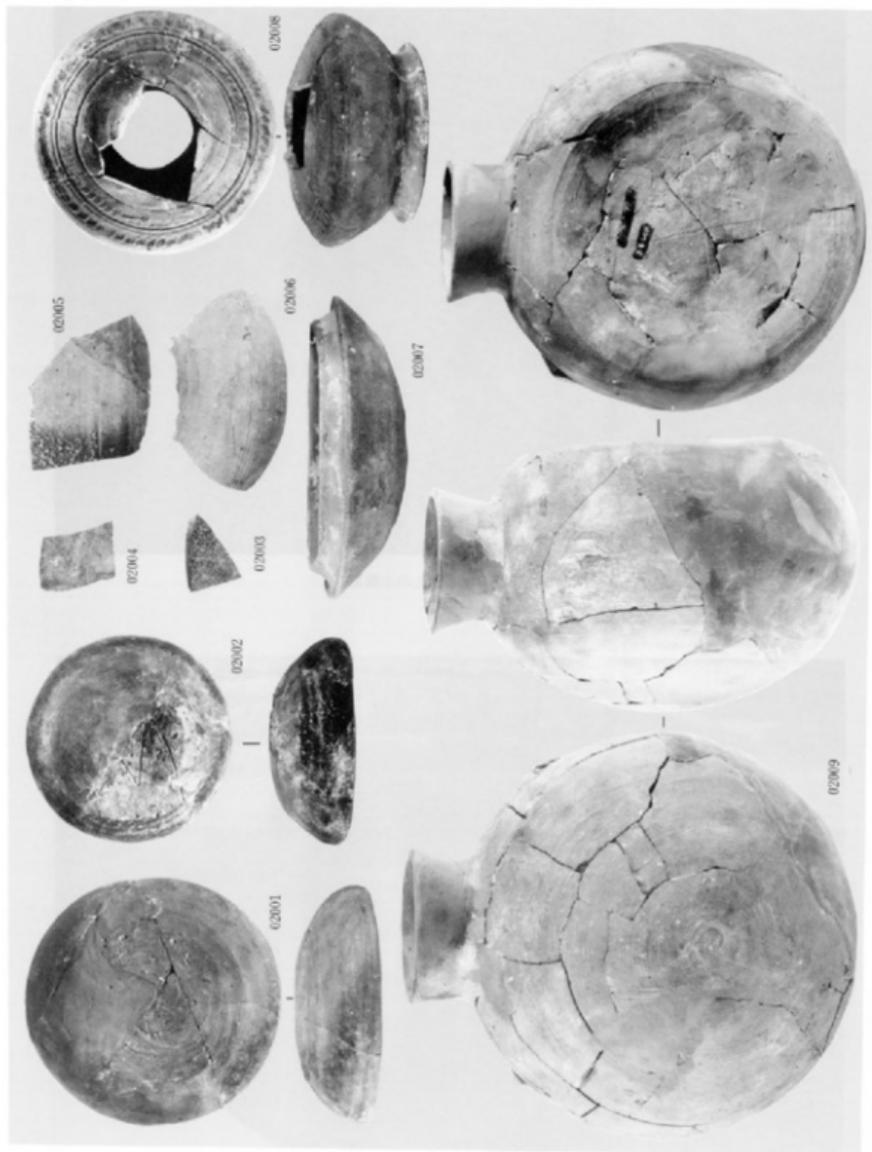
(2) 左側袖石部分（玄室より）



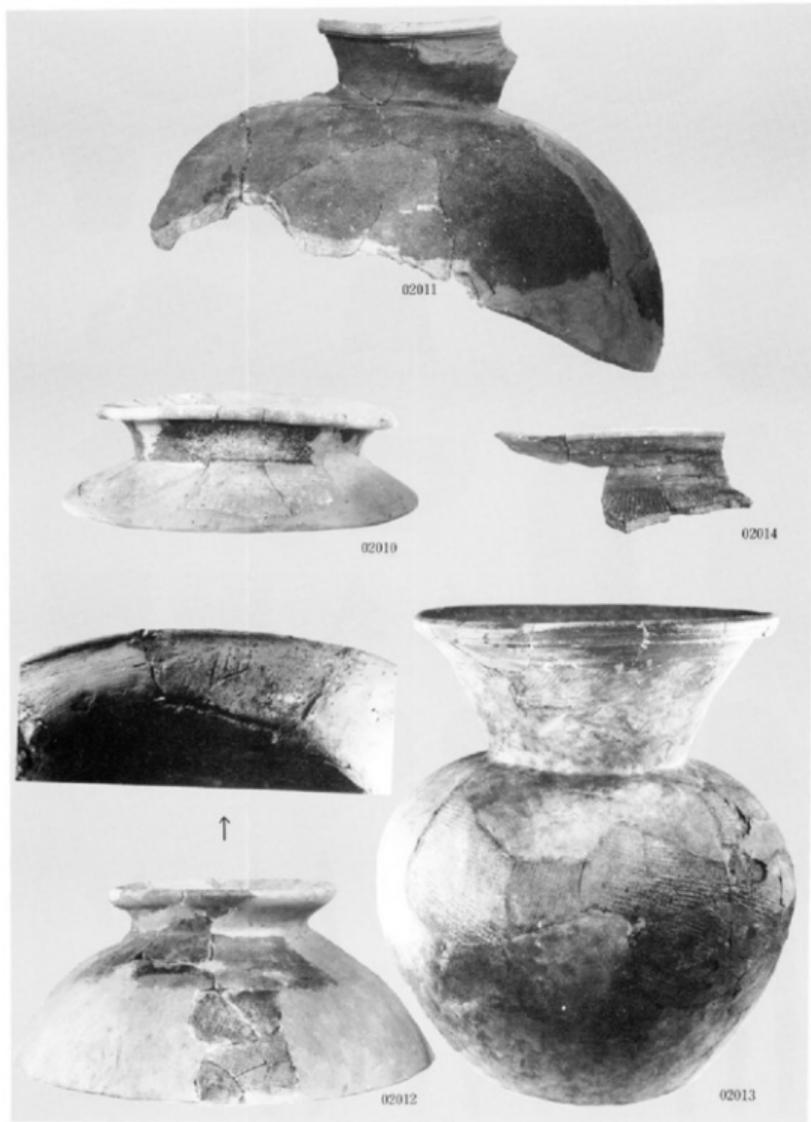
(1) 玄室内より出土の土師器



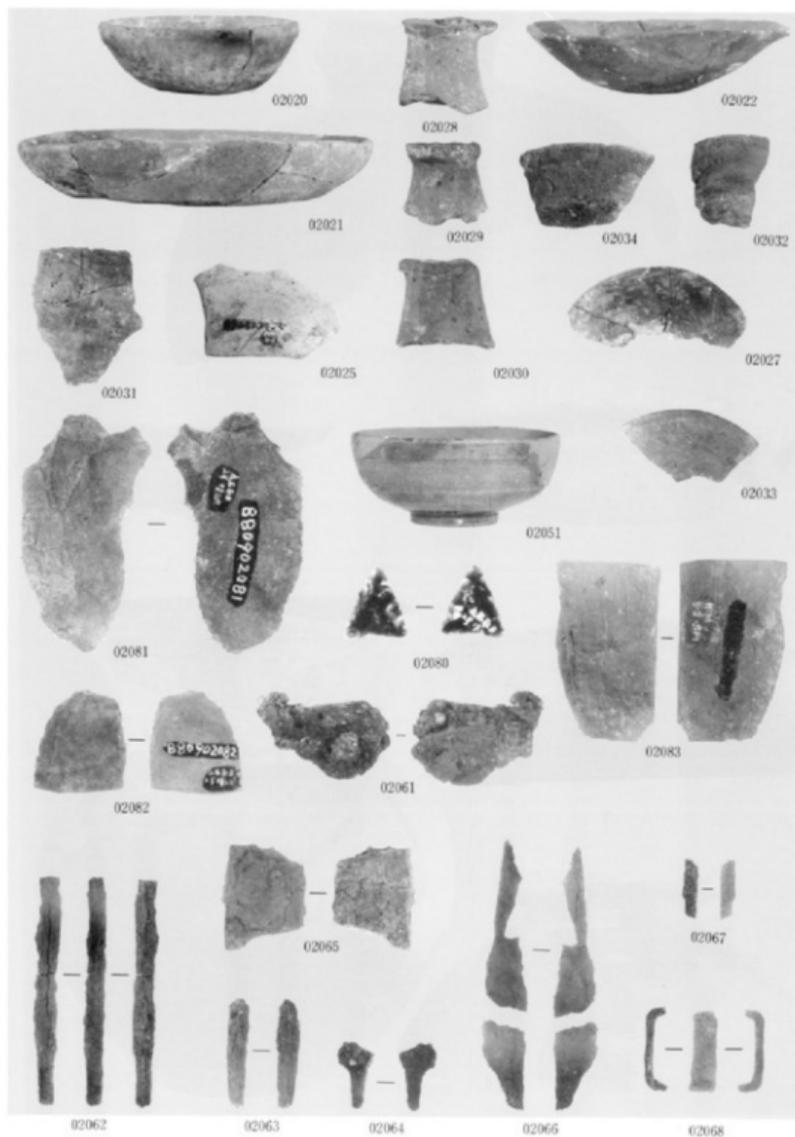
(2) 玄室排除後の廻り方（西から）



(1) 2号墳出土遺物-1 (縮尺1/3)



(1) 2号墳出土遺物-2 (縮尺1/3)



(1) 2号墳出土遺物-3 (縮尺1/2、1/3)

宏石南古墳群

福岡市埋蔵文化財調査報告書第214集

1989年（平成元年）3月31日 発行

編集発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 備松古堂印刷



「この空中写真は、建設省国土地理院の航空写真をもとに、同院発行の1:5万の航空写真を複製したものである。」(建設省国土院76年11月版、第3頁)



